川柳雜誌

麻生路郎★主宰

Pesoi flugas trans la landolimon

★兵士は戰線に！ 我等は銃後に！

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十四年十二月十五日發行 第十六卷第十二號（毎月一回十五日發行）

★最高權威の月刊柳誌・人生勉强の標識燈

191

第十六卷 第十二號

毎月十五日發行

川柳人協會主催 ★ 大阪朝日新聞社會事業團後援

同情週間

師走川柳大會（第三回）

▼鉛筆持參の事

川柳を作らない方も出席して歳末の川柳味を味って下さい！

新東亞建設のため皇軍破竹の戰捷は國民擧つて感謝するところである。銃後の私達はいよ〳〵皇軍の武運長久を祈ると共に歳末に際し特に惠ぐまれざる人々のことをも考察しこゝに本會は第三回師走川柳大會を開催し、出席者の會費全部をそれ等の惠ぐまれざる人々へ贈ることゝしたオール川柳人の來援を切望する。

日時 十二月二日（土）自午後六時至十時（時間嚴守）

會場 大阪朝日新聞社三階大廣間 ▼なるべく浴衣又は草履のこと

司會者 水谷鮎美

映畫挨拶兼題 「○○○○」上映六時○五分から 川柳人に告ぐ

「石炭」川柳雜誌社 橋本綠雨選
「神樣」昭和川柳社 小川百雷選
「蔭膳」松坂倶樂部 川出美根子選
「勘違ひ」とのみ川柳會 好崎申仙選
「戰友」阪大川柳會 長崎柳秀選
「餅」三越川柳會 栗原空栗選

映畫を題材として川柳を創作する事（須崎豆秋選）
川柳人協會理事長 麻生路郎

▼締切 十二月一日午後十時着・各題二句・各題別紙・住所氏名明記の事

▼投句所 大阪市西區江戸堀上通二ノ四六番地 昭和ビル 川柳人協會宛

「」川雜支部代表 西いわを選
「」蟻鄰川柳社 河野夜王選
「」有恒川柳會 寺井銳々選
「」鶴橋川柳會 梶文葉選

席題 批評は親切に演壇に立ってから？

講演 川柳人協會・名譽會員 堀口塊人
川柳人協會・名譽會員 村田周魚

會費 金五拾錢 各地の出句者は兼題と共に小爲替參拾錢又は貳錢切手拾五枚同封のこと。入賞句呈賞（會費同封なき句は選者に廻送せず）

賞品 ▼天地人五客へ呈賞、各題天位へ副賞として大阪朝日新聞社より記念品贈呈。出席者全部に粗品呈上

記念撮影 希望者に實費で願つ

大會委員（順序不同 敬稱略）

路郎 塊人 周魚 綠雨 水客 雷丹 水堂 潮秀 花樂 百里 八九 十九 滿乃 青霞 青一 夢夕 曉童 ゆ怪る 布斗 繁香 風いわを 雨々 鋭 文葉 松園 はるを 小柳子 翠陽 おさむ 至藝瑠 一 丁虎 双葉 落 五 黃波 孤篷 南濃路 寄與史 美根子 王 夜 四路平 光路 申 村句茂 仙 白面人 某人 由布 貼美 秋 豆 鋭 文 小 白柳子 一波 祖童 万よし 江 よし 形水 小柳子

▼大會に關する御用件は
大阪市西區筑前橋電停前昭和ビル
電土8163・8164・3333

主催 川柳人協會
後援 大阪朝日新聞社會事業團

★戰線へ銃後へ爆笑へ快る送を著！

新川柳評釋

麻生路郎著

本書は本誌に連載され名評釋として好評嘖々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕妙さは日本柳壇に於ける著者の獨壇場である敢て應む！

★ 四六版上質紙フラ綴一〇四頁
★ 定價八十錢 送料六錢
その他外地八十八錢 鮮・朝・太・滿・洲・臺

麻生路郎序・石井白面人編 川柳 **人の一代**（紙版）賣切

麻生路郎著・柴谷柴舟漫畫 川柳漫畫 **累卵の遊び** 特價八拾錢 送料九錢

麻生路郎序・阪大川柳會編纂 川柳句集 **大川端** 頒價壹圓 送料九錢

麻生路郎序・橋本綠雨著 川柳句集 **街の雜音** 定價五拾錢 送料六錢

「川柳雜誌」合本（菊版時代）一部壹圓半 送料卅錢
「川雜投句箋」一册十五錢 二册廿五錢

序・百田宗治・麻生路郎・跋吉川則比古 著・高鴛亜鈍・裝幀田村孝之介
隨想集 **詩人復眼**（近刊）限定版定價壹圓 送料六錢

堺市出島町三五一番地
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二番

第十六巻　川柳雑誌　第十二號

皇紀2599年を送る

★世界が一ト揺れゆれて、歐洲では地圖の中から消えて無くなつた國さへ出來た。その點、日本人は幸福だ。殊に私たち趣味陣營にあつて人生を闘ふものの幸福は、幾ら感謝しても感謝しきれるものではない。

★皇紀二千五百九十九年を回顧すれば本誌の活躍は實に目ざましいものがあつた。本年一月號からは再び、有保證新聞紙法の刊行として柳誌中獨歩の存在となつた。

★川柳勇士とその留守部隊を繋ぐ訪問記が燦然たる光りを放つたのもこれあるがためであつた更に我等の創作と、その時代、その世相を尤も簡單に識り得る「内外時事」と「社會ページ」は本誌の特權でもあつた「演藝・映畫に川柳を觀る」ことも又その圏内の一つ。所謂俳詩問題に就いては嚴然たる態度を示してその誤れるを是正し、月評會の復活は新人の渇を醫するものとして歡迎された。川柳勇士の隨筆は好讀物、研究並びに雑文は既に定評あるものここに贅筆を弄するまでもなからう。

★特記すべき句筵としては尾道に於て開催された西日本鐵道人川柳大會、松坂倶樂部綜合展へ川柳講座の參加とその大會、並びに大阪朝日新聞社會事業團後援の同情週間師走川柳大會等々々を擧けることが出來やう。

★要するに聖戰後の趣味陣營は間口に於て奥行に於て遺憾なく發揮し得たことを想起して悠々越年の歡びをよろこぶものである。

佐大観靜川小　　海拉爾にて

★★★川柳勇士の隨筆★★★★★

大阪の兵隊さん

南支　酒井美知夫

食ふ事が云へたら兵隊は一人前。蚊帳の中の話しは、いつか食ふ方へうつゝつて居る。皆んな大阪及大阪附近の出身だからたまらない。なんぼでも美味しいもんを知つて居る。およそ現在の生活と縁の遠いものばかりだ。こうなつて來るとおとなしく寝て居た者までが頭を上げて仲間入に來る。ようかん、饅頭、最中、カステラ、風月堂が出たり、長崎堂、駿河屋等々、今度は茶だ。心齋橋大丸の向ひの茶の香りの話し、甘いもんの話しの後、茶の話しだから申し分がない。誰やらが咽喉をゴトリといはした。〃誰やいやらしいな〃Kのやつらしい。笑つて居る眞暗な中で。やつは大の甘黨だ。次はすし、〃マグロのにぎり、わさびきかしてこうしてつまんで〃手眞似してやつて居るらしい手が動いて居る〃マグロより海老の生きたんがよいや〃〃ピン〃〃か〃〃なんぼぐらいいけるやらうな〃〃サア〃こうなつたらおさまりが着かん。今度は大食の自慢だ。どこそこの洋食何枚、末廣のカツを何枚食つたの、どれもこれも相當いけるらしい。皆んな一騎當千だ。甲種合格出だ。一年餘りもこんなものに敬遠されて居るんだから、江戸の敵を話で討ちとるらしい。だん〃話が大きくなるばかりだ。そろ〃よその分隊からも半疊がはいる。げに大阪は食ひだをれを痛感させられる。松茸が出た。今度は松茸だ。なんぼなと云へ、どうせ話しだけだ。

松茸の話しに秋の夜が更ける〃オイ皆んなもう寝よう。明日があるぞ。皆んな大分食つたからこのくらいでえゝやろ〃〃夕飯早く食つてこんな話しだけ聞かしてこのまゝ寝さすのん殺生やで オイ〃。とう〃悲鳴だ。誰しも皆んなベコ〃だ。〃水でも飲んでこい〃皆んなが笑ふ。これでは寝つかれない。

★内外時事★

☆忠靈塔はいかなる神佛宗派で祭司してもよいことに決した（十一月四日）

★白米最高價格決定十四キロ一箩米四圓七十五錢。（六日）

☆兵役改正の骨子は新に第三乙種を設けて第二補充兵役に編入し、さらに第一乙種以上は現役兵、第二乙種は第一補充兵、第三乙種は第二補充兵に編入、昭和十四年十二月一日より施行。（十日）

★十日夜オランダ國内の一部は深さ三尺に達する浸水で掩はれた。戰術的に重要なバール、ジストの兩村は洪水の中に沒し、道路は誰も交通出來ぬ狀態となつて主要建築物には軍隊が入り込んでゐる。

☆日本郵船照國丸は廿一日夜イギリス東海岸沖合で機雷に觸れて爆沈した。乘客乘組員二百九名全員無事。

不朽洞句抄

麻生路郎

親の子か　もうピストルをもて
あそび

うるさ型の泊まる宿屋が水を打ち

父の名を呼びすてにするまひごの子

オツサンと呼ばれ戰闘帽似合ひ

花提げてあるき嫁入まつばかり

表紙寫眞…（大同・石佛）……岩崎柳路
内外時事……（一）
社會ページ……（一〇）
皇紀2599年を送る……（一）
武玉川四篇研究（一）……梅本秋の屋
御時世（隨筆）……小山文三（一〇）
風やの辭世問題に關聯して……蛭子省二（一〇）
大阪の兵隊さん……酒井美知夫（一）
戰線に拾ふ……月原宵明（一一）
漫畫陣中鏡……北みきを（一一）
川柳解題と例句……路郎編（一〇）
朝鮮雑記……弘津柳麈（一二）
月評　川柳一ト筋……（一二）
路郎・丹路・某人・亞鈍・曉童・銑人
演劇・映畫に川柳を觀る……某人・曉童・石鐵・夕鐘・鮎美・葉光（一一）
青風
貝釦……岡田某人（一三）
片假名と川柳……前山北海（一一）
★
近作柳樽……麻生路郎選（一四）
川柳塔……麻生路郎選（一四）
同舟近詠……諸家（八）
不朽洞句抄……麻生路郎（一）
一路番傘……高橋かほる選（一五）
各別莊……寺井鋭々選（一六）
集地柳壇……（一六）
後記（表三）……社關係の人々（表三）
柳界展望……川雑案内……（一三）
川・協……（八）

十二月號目次

亞鈍●曉童●某人●丹路●郎路●銃人（記筆）氏諸の萬——影撮氏的

評月 川柳一ト筋

路郎・某人・丹路
亞鈍・曉童・銃人

丹路＝夕鐘氏が遲い樣ですがそろ〳〵初めませうか。

丹路提出＝近作柳樽

丸刈が半分延びて秋の戀　岩崎　水虹

某人＝戀に初まりましたね。

亞鈍＝「川柳雜誌」が、大阪の某川柳雜誌の如く、時局川柳を標榜してゐないが、然し此の時代に生きてゐる吾々川柳人にとつて、之は生活の上から云つてのつぴきならないものと思ふ。それ丈に川柳が何時の場合でも生活から滲み出たものであるとするなれば、別に戰時川柳と云つた大きな旗印を揭げなくともそう云ふ句は矢張り出て來るだらう。前々月の伊藤入仙氏の句に「悲がなく申譯なく次女生れ」があつたが、これは別にこの事變がなくてもあてはまる句である。然し、この長期抗戰期にあつて餘計に浮彫されて來る句だつた。ところで今丹路氏が提出した句になるんだが、先づ想像な、けば〳〵しい戰時色を出さずして、秋の戀と云つた、一つの人間情緒と云ふか、そう云ふ處に僕は感心させられた。

某人＝提出者丹路氏の好みにぴつたりしてゐる句だと思ふ。つゝ込むとつゝ込めさうな所がありながら、一面それをしたくない氣が起きて來るのは、この句の持つ素直さのせいだらうと思ふ。若々しい綺麗な句、僕のうけとる感じはそれだ。

丹路＝僕はこの句から、この作者が大いに伸びる事の出來る人だと思つた。句そのものは某人氏が、一寸云はれた樣に、完成した句とは思はないが、此の句も中々作者の可い素質を感じて提出しました。

曉童＝丸刈と云ふ言葉から來る先入感によつて、一應は亞鈍さんの云はれた樣な句意にとつて見ましたが、「半分延びて秋の戀」と云ふ所を二度も三度も讀み返してゐると、除隊兵の句を些かめぐらして見たなれば凱旋した丸刈の兵隊が、漸く落付いて來た頃に秋の戀をしたと云ふ、一面青年の持つ事變に關係のある句にしてしまつてゐる、それをおほつぴらでなくて、普通の青年の一斷面を詠んだ句じやないかと云ふ風にしか考へられない。それに就いて何か御教示賜りたいです。

亞鈍＝御教示とは恐れ入るわけですが、今先に某人君や丹路君が云つた樣な、句としてのよしあし、そう云つた事は僕の言ふ柄じやないんだ。それで別のところから何か喧嘩したくなつて來るが、「そうれ、うるさくなつて來たゾ——の聲あり」それは雜談の時にして、つまり、この句を曉童さんの言ふ通りに解釋しても、それはかまはない。然し、この句の背後に事變と云ふバックを持つてくれば、この句は先の入仙氏の句の樣にウンと浮び上つて來るんじやないかと思ふのです。で丸刈と云ふ事を凱旋兵と云ひ切つたが、それは事變の中の青年の一人の例として擧げた丈で、これをこの事變の故に、新聞紙上や何かで云つてた丸刈禮讃が事變中の青年と云ふ、一般的な意味に解釋しても可いだらう。そして、丸刈は或は非常時の精神を引締める意の、丸刈とも考へられるがそれにかこつけて夏の暑い時に坊主にしてしまつた男もあり得るわけだ。何れにしても「半分延びて秋の戀」と云ふので、きつちりと動かない句にしてしまつてゐると思ふんだが……。

某人＝今の夏から秋の移り變りに關する亞鈍氏の說は贊成。それから、それと同時に、事變云々と云ふ事も一面うけ入れていゝと思ふ、せんじつめると要は丸刈の持つ烈しさ、秋の戀の持つ落付き、この二つのものゝ間の時間的推移が云はゞこの句の焦點で、曉童氏の說にも亞鈍氏の說にも反對し切れないものがあると思ふ。

曉童＝こう云ふ場合、句主を知つてゐると云ふ事が、或は時局の句でないと私に感じさせたのかも知れない。丸刈と云ふ事も、秋の戀と云ふ事も、川柳作句上の常套的な省略法で、句意が動くと云ふ事が、說が二つに分れる原因だと思ふ。

某人＝句意は動かないと思ふ。

曉童＝時局の句であるのと、でないのと。

某人＝どつちだとしても。

亞鈍＝「川柳雜誌」と「昭和川柳」との行き方の相違の如くだね。

某人＝僕は作者を知つてゐるだから出來る丈作者を考へまいと解釋して今の結論に到達した譯です。これは曉童氏と反對から入つても結局同じ形になるんですが……。

曉童提出＝近作柳樽

菊ほめてお茶をよばれた赤だすき　夷一笑

曉童＝菊を作る主、赤襷の客齡の違ひはかなりあるけれど、平素うまが合ふといふものか、傍から見るのも可笑しい程の間柄だらう所の二人、急に赤襷で別れに來られた時の、さし迫つた兩者の感情を汲みとる事の出來る可い句だと思ふ。句そのものゝ上からいけば、「菊ほめてお茶をよばれた」と云ふ在來の極く詠みつくされた處の句語が下五の「赤だすき」によつて淡ましい許りに銃後の時局吟として完成されてゐる事に非常に興味を感じる。

書け一奇に
全国便箋

某人＝キングの卷頭の着色寫眞みたいな（笑聲）感じです。たゞ、言葉に拘はる樣ですが「菊ほめて」と常套的に出た所が、も少し物足りない感じがするんですが、これはこれより仕方がないでせうか？

丹路＝エーと……仕方がないね。

曉童＝「菊ほめてお茶をよばれた」と云ふ二段切れになつてゐる表現も、この場合そのさし迫つた感じを出す一つの方法として、特にこの場合成巧してゐると思ふ。

某人＝僕はその「ほめて」と云ふ言葉から何となしにお世辭めいたものを感じる。むしろこの場合には單に「菊へ來て」位でスラリとさしておいた方がよかないか、つまり何かそう赤だすきを受けた人が、挨拶に來て菊をほめて歸る事が不自然な風に考へられる。

亞鈍＝「菊ほめて」と云ふ言葉を某人氏はあまり大袈裟に考へてゐる樣に思はれるが、「菊ほめて」と云ふ言葉で川柳的表現から常套的かどうかは知らないが、句意全體から考へると「菊ほめて」は言葉通りにとらずにその訪ねられた人が座にゐるその庭へまわつて顏を會はした時に、たま〳〵美事な菊が咲いてゐて出合ひ頭に思はずほめたと云つた、きつかけの挨拶位に思へるんだがどうだらう。

某人＝きつかけ挨拶は恐らく現實では菊などほめないで、いきなり應召の事に觸れると思ふけど。

亞鈍＝だけど、それはどちらかじやないかね、つまり、うつかりしてた方が、訪ねられた主人だとすると。

某人＝ヘッ、（某人その意味わからない風）

亞鈍＝普通の常識から考へれば君の言ふ通りなんだ。然し、かりに、その家の主が菊をいぢつてゐる庭先へ平素御用聞きか何かのずつと身分の低かつた應召兵が、挨拶をするために氣輕に庭先へまわつた時の呼びかけの言葉として、先づ菊をほめたと云ふ事は考へられないでもなからう。

某人＝想像をそこまでゆくか

丹路＝僕は餘り詮索が過ぎると思ふ。某人氏が言ふた菊ほめてが、お世辭めいた嫌な氣分を持つたのは、菊ほめたからお茶をよんで下さつた。そう云ふ風にもとれる。その菊ほめてがお茶によばれたに響き過ぎる點で「菊へ來て」の方が、確かに素直な句になると思ふけれど、この句に現れてゐるのは人物の動き丈であつて、それはわざ〳〵五七五にする程の氣分もそこに醸成されてゐないと思ふ。

亞鈍＝丹路氏の言ふのは句の素材として、とるに足らぬと云つた意味ですか？

丹路＝まあそうです。

亞鈍＝それなら言はして貰ひますが、これが外國人の應召受けた時の場合と違ひ、御國特有のあらゆる感じが（民族性と云つてもいゝが、）いゝ意味で出てゐないですか。

丹路＝それは川柳の特殊性であつて、川柳の藝術性と云ふものに就いては、そう關係のないものだと思ふ。

某人＝僕は「赤だすき」がよばれたのが一つの材料として見つけどころだと思ふ。

曉童＝初めに斷つた樣に、この句の「赤だすき」つまり時局の句であるから成功してゐるので、下五が御用聞きか外務員でもあれば、勿論沒にもなるだらうし、私も提出はしません。そんな下五の時に丹路さんの言はれた素材がとるべきものでない事が適用されるんじやないかと思ひます。

亞鈍＝それから、丹路氏より川柳の特殊性があつても藝術性がないと云はれたそれをも少し說明して貰へませんかね。

某人＝それや、問題が大きくなるぞ。

亞鈍＝僕は川柳に特殊性があれば、藝術性もあり得ると考へるんだが、然し、それより先に特殊性と藝術性の言葉の概念の檢討をして掛らなければ、丹路君の言ふ事も、僕の言ふ事も變挺な解釋が成立つ譯だ。

某人＝その邊の見解は益々大きくなるから後日丹路氏に雜誌へでも一筆書いて貰ふんだね。

（筆者註其の後、雜談にて丹路亞鈍の檢討ありて解決さる）

路郎＝では一つ僕が、この句に就いて言はうかね。『菊ほめて』が、どちらかと言ふと響き過ぎたために、いろんな論點を生じたので、も少しそれを輕く見たならば、亞鈍君が云つてた說が、この句には一番近いんじやないかと思ふ。そして、「菊ほめて」と「お茶をよばれた」との二つの齣のを赤だすきと訪ねられた人の身分の相違による其の場の情景を出してゐると思ふ。勿論訪ねられた方が齣もとつてゐるやうし、社會的地位も上であらう、從つて菊に樂しんでゐるのに對する一つの挨拶をした譯である。某人君が言はれた樣なせつぱつまつた人が、挨拶を菊を兼ねてするのは可笑しいがと云ふのは、十中の八分迄はそうであるが、地位がずつと違つてゐる場合にはそう云ふ挨拶が行はれる方面も、後の二分にはあると思ふ。

銃人＝この句から受けた感じでは、私の經驗上應召日迄には相當間がある樣に僕には思へます。

某人＝實際に應召した人には勝てんね。（笑聲）

某人提出＝近作柳樽

太陽の熱を感じてゐる無口

麻生アート

某人＝この句を讀んでゐると背中が、ほつこり、暖く感じられるのは僕丈でせうか？

亞鈍＝いや、君丈ではない（笑聲）それ丈か。某人らしくないねエ。

某人＝貝釦だよ。

亞鈍＝ヘーン。僕は田螺の樣な、泥々しい氣持から言はして貰ふよ。何と云つてもアート君は、僕の好きな男だからねエ。サーと、このほつこりと背中に太陽の熱を感じてゐると云つてしまへば、それ迄ヨだが、某人の樣に何故にこの句丈、そんな無口を粧ふと云ふのかチト可笑しい。先生に遠慮してゐるのかな。僕はこの無口な男が案外、うちらに烈しいものを持つてゐると、內面的な觀察をくだして、この句を單なる情景に見てしまへない（アート君を知つてゐるから言ふんじやない、僕が句評する場合は全然作者を忘れてしまつてゐる）何故そう感じるかと言ふと、少し駈出しの者として、某人先生や、丹路先生達に恐縮する（が某人――イヤ〳〵）熱と云ふ文字と無口を下五にきつちりはめ込んだ處、そのコントラスト、川柳的な技巧として堂に入つたものじやないかしら。只その場合に太陽と云ふ最初の言葉が、一寸熱と云ふ言葉とのアナロジーが、平凡なものゝ樣に思ふんだ、それは技巧の上で飛躍して貰いたい點、必しも太陽と熱との重復だと言つてしまへないものがあるんだが。

某人＝それは亞鈍の杞憂だと思ふ。太陽の熱で少しもアナロジーを僕は感じない。それから斷つておくが、これはアート君の句だから提出したんではなしに、議論のない共感の句として提出したんだ。

亞鈍＝それで判つた。平素こんな會を除けば無口な某人を思うと、それと同じ男の句だからウーンと參つたんだな。

某人＝左樣。さつき亞鈍が遠慮してゐるんじやないかと云つたけれど、僕は遠慮と大掃除が大嫌ひだよ（哄笑）句を見る時は、作者名を出來る丈見ない樣にして、なにかに、ぶつつかつた時に、初めて句主の名を見る。ちと理屈を言ひ過ぎる僕が默つてこの句を提出したのは、あながち題材が無口なせい丈ではなく、路郎先生に叱られなかつたら、ヨーと言つて作者の背中を一つ位どやしてやりたい位のものである。しかもこの句に就いて亞鈍がこれ位喋つたら提出した値打ちは、充分あると思ふ。

亞鈍＝餘計な事だけど、僕は太陽が出ても、出なくつても熱を感じてゐる男らしいんだ。某人やアートの如く無口で陰に籠つた樣な男になり切れない、むしろ反對の人間丈にこの句を推奬したくなるね。

某人＝それは君と僕との血の量の多少だよ。

亞鈍＝それで水虫が出たのかな。（哄笑、筆者註、亞鈍一ケ月半惡性の水虫に惱され某人の見舞を受く）

路郎＝（失笑しながら）君達がそう樂しんで喋つてゐては不可ンネ。（哄笑。某人、亞鈍兩人てれる）

亞鈍＝叱られた。（某人の方へ向き目配せする）然し、僕は何もかも忘れるんですよ。先生！

路郎＝この句を某人が提出した時に、成程ナーと思つた。非常に共通點があるのかも知れない。大體アートは小さい時分から非常にユーモラスな、朗かなしかも皮肉を兄妹間にカッ飛ばす方であつたが、十五六の頃からすつかり無口になつてしまひ、恐らくその時分から太陽の熱を感じる樣な男になつたんじやないかと思ふ。性格的に云へば亞鈍君とは正反對で、某人君とは共通點が、可成あるんではないかと思ふ。ついでに、その無口をもつと具體的に說明すれば、放浪性、ルンペン性、と云つたものをうちらに持つてゐると思ふ。

曉童＝この句を詮索したりするより、この句を生む前の作者の太陽の熱を感じてゐる姿を想像して見た丈で、川柳の面白さ有難さと云つたものを感じて充分だと思ふ。

亞鈍提出＝近作柳樽

男だ！說明が邪魔くさい

山本葉光

亞鈍＝僕も男だ、說明が邪魔くさい。（失笑）

某人＝君も男だネ。（某人苦笑の儘無言）

路郎提出＝川柳塔

物干へ出て女中さん空を見た

奧村丹路

路郎＝今も昔も、或束縛の中に生きてゐる女中さんが、僅かの時間に空を見ると云ふ、それ丈で充分この句の言はんとする事はうけとる事が出來る。さう云ふ句を解剖的に說明すれば、何處にそんな味があるかと言ふ疑問も出ようと思ふ。むしろ繰返し〳〵口づさんでゐれば、はつきりと感じ得られる句である。もう二十幾年の昔だつたと思ふが、葭乃の短歌に物干へ出て洗濯物の竿を扱つてゐると、その大空の方へ振り上げられた竿の先へ小鳥が吸ひつけられて來ると云ふ樣な事を詠んでゐた事があるが、それと違つて、同じ女性ではあるが、女中さんが空を見た所に階級的なものをはつきり描出してゐて非常に優れた作品だと思ふ。

曉童＝私はこう云ふ風な句を鑑賞する私の獨特な手段として句に現ざれた人物のその時の氣持に立ちいたつてみたり、作者のこの句をものした時の心境へまで、立ちいたつてこうした時にこの句が出來たんだナーと云ふ樣な憶測をめぐらして一人悅に入つてゐるのです。だから、いゝ句だナーと云つてゐて他人に說明を具體的に求められると、何時も出來ないが、句を作る悅びと別に句を鑑賞する悅びをこういふ句から見出して、川柳は嬉しいと思ふのが、私のこんな風な句に對する鑑賞態度です。

亞鈍＝輕蔑すべきものは、女性である。とは僕の女性觀の骨子だが（笑聲）その輕蔑する女が輕蔑する女中さんに對しては、僕は母親よりもかばひたくなる。今の女中飢饉に世の奧さん方ザマー見ろだ。

丹路＝先生に聞きたいんですが、僕がこう云ふ句を作つてゐる時の心境と云つていゝか、川柳に對する態度、それを其の儘押進めて行くと、川柳と云ふ事を忘れてしまつて、別なものに迄進んで行きさうな氣がして、ある不安を感じるんですが、もうその時は川柳と云ふ觀念も何も頭になくて自分として何かブレーキのかゝらない電車みたいな氣持がするんですが、それでいゝんでせうか、その癖出來たものから逆に考へると、長年川柳をやつてゐたお蔭と云ふか、川柳らしい句が矢張殘つてゐます。

路郎＝僕はこの句が川柳でない樣になりつゝあるとも思へないし、段々押進めていつたら川柳でなくなるとも思へない。押進めると云ふ事が、こう云ふ境地からかけ放れた方面へ行くことだとも思へない。もしそう云ふ事を考へてゐられるとすれば世の中に對して何でも、そう云ふ不安を感じなければならないかと思ふ。只押進めて行くとは言ひ條遙か向ふは作者自身にも判つてゐないだらうし、まして第三者に判らう筈がない。それを僕に聞かれても說明し得られない。形式が全然破壞されてしまひ、或は內容が、何人も想像し得られないものになつてしまへば、勿論川柳とは云へないだらうが、これ等の句を押し進めて行つたからとて、恐らくそんな事は想像し得られない。

亞鈍＝先生の後で、おこがましい樣ですが、丹路氏のその不安は川柳家たらんか、人間たらんかのヂレンマに立つてゐるのではないかと考へられる。もの言ふのが面倒くさくなつたから某人君に廻さう。

某人＝僕はどつちかと云ふと押進めていつて外れる不安を感じるよりも、むしろもつと外へ出て行きたい樣な氣持で一杯なのだ。と云ふのは川柳以外のものと云ふ意味でなしに、在來の川柳から出て行きたい、そう云ふ風に考へる。だから僕の言ふ事は、或はあてはまらないかも知れないが、丹路氏の今の不安は了解出來るんです。然し、出て行こうとする人間でも、出て行きさうな不安を感じる人でも結局川柳と云ふものを拾てようと決心して、それを斷行しない限りは、何處までも川柳と云ふものはついて廻るんであつて、その點丹路氏に言ひたい事は、むしろその不安な先まで引返さずに一邊出ていつてみたらどうかと云ひたいんです（銃人筆記）

近作柳樽

麻生路郎選

結局はラヂオ屋呼んで來いと云ふ　名古屋　清見松夢
良く稼ぐ女工醜くさ知つてをり　同
罐切りの夫の力見くびられ　同
泣いてゐる母へ捕えた虫を捨て　同
急用をもつて木炭バスを避け　同
まだ來ない幹事が切符持つてゐる　同
左遷の土地で魚釣の入門書　同
書生又犬の時間へ本閉じる　同
美容院前の喫茶で持つてゝね　同
考へすぎる男となつた子が四人　大阪　淺野李介
藥代がかさんで十一月は暮れ　同
切つた毛も拔けた毛も同じ秋の毛　同
一本で濟まさうといふ貯蓄心　同
いぢましい心になるも時の色　同
似てるとか似んとか我子で云ひ爭ふ　同
秋の夜スタンドの色變へて見ん　同
一線でソースが欲しい物も食ひ　南支　酒井美知夫
何氣なく思へば今日は誕生日　同

軍服交換

戰はこれからといふなりに出來　同
爆擊の跡で蛙は泳いで居　同
恩情は知つて居ります支那の犬　同
熱演を見とめられたり慰問團　同
絶景も見ずに女はしやべつてる　廣島　大森千代香
ぷいと横向く女から手紙が來　同
編みながら歩かせながら溫い土手　同

召集解除雜感　三句

防諜だいつそ無口のまゝでおろ　同
口笛で起床ラッパを吹いて起き　同
生還へ保險屋の世辭を遠く聞き　同
捕虜の瞳が動かぬ雲をじつと見る　北支　月原宵明
妹があつたらやると仲がよし　同
ランプ拭きふと故郷の祖母のこと　同
殿りの車輛に豚と鶏と　同
立哨中異狀なし棗落つ　同

出征二ケ年を迎ふ

ふたとせのはなし天津栗の殼　同
死刑囚靜かに飯を喰つてゐた　岡山　鈴木九坡
除隊して背廣の寸がちと詰まり　同
蠻カラが戀知りそめぬ髭剃りぬ　同
そのかみのバーバリズムが戀を知り　同
荒らされた膳の魚の目が白い　同
靈柩車人一代の豪華版　同
私服で來ると巡査のよく喋り　大阪　米谷松太樓
父に似た顏を見つけるニュース館　同
これしきのことに亭主を賴むなり　同
宿題がみんな出來てるハイキング　同
尋卒で子は大學を出すつもり　同
人生を戰ひぬいた顏の皺　同
酒癖と知つては居るが腹が立ち　大阪　富岡巨人
米の値も知らぬ御主人ばかりなり　同
斷はりを妻に任して鼻毛拔く　同
人樣に任して置けぬ氣性です　同
遮斷機で待たして汽關車一ッきり　同
癇の立つ譯は隣りのラヂオなり　同
灯管下演習でよし碁を圍み　大阪　松枝靜波
モンペ服着ても藝妓の美しさ　同
十二月いつぺん算盤要る夜なり　同
ラッシュアワー丈に見合はす顏馴染　同

右拇指怪我して手術を受く

痛む指妻のすることけなるがり　同
男てふ沽券にかけて金策す　下關　櫻川不水
おろかしや捕鼠器の中で氣色ばみ　同
唾棄すべき群衆心理俺も有つ　同
博多帶よく締つたはほんと打ち　同
おもちや屋へ引つ張る力嬉しがり　同
顏に似ぬ顏で寫身師兒をあやし　廣島縣竹原町　西野みづほ
保險金これが自分の孝行か　同
寢白粉濃くしてもみる俺帶期　同
立志傳下足番もしてました　同
二階借求人欄を見て出かけ　愛媛縣大洲町　片岡曉夢
肱枕夜汽車は同じ型でゆれ　同
丸ビルは四角にアグラかいてゐた　同
左遷されて來た此の町が名所なり　同
いゝ風へ荷車道へ置いたまゝ　同
間違へた道それも良しハイキング　同
歸還して早速出來た男の子　奈良縣龍田町　嶋田翠峯
親類でイの一番の赤襷　同
立ち飲みで引つかけて來て末座に居　同
月賦とは見られとむないモーニング　同
本願寺樣が日あての京の旅　同
道具屋は聞いてるラジオも賣る氣なり　大阪　寺尾破衣
白ボクを持たせばイキナリ大日本　同
千人針尼僧の下駄の緒が白い　同
重役におじぎをしてる父をみる　同
うちの子も混つて柿を盜りに來る　同
發禁のそれから作家賣れてきた　廣島　石原伯峯
痔せこけた男夕陽を浴びて行く　同
新婚は今日の映畫を眞似てみる　同
小說にしたい話を聞いてゐる　同

友人の死を悼む

三人の君まん中にゐる寫眞　同
割箸も退院と言ふ音のよし　松山　宮內耕朗
秋風の中でこゝろを取りもどし　同
或時人間と言ふをさびしみぬ　同
鉛筆が一本机も久しいほこり　同

うたがひに慣れて善人怒らない　松本　小宮山雅登
番台もふけか抜毛か吹き落し　同
風強しわたしも強く生きてゆこ　同
月が出て職人同志で呑もうかな　同
石、お前にも心はあるんだろうね　堺　麻生アート
それぞれの煙となりし卷煙草　同
悲しみをクローズアップしてみたり　同
粉薬（コナグスリ）あさの光へぱつと散れ　愛媛縣大洲町　澤松異天樓
女住居亡夫の表札そのまゝに　同
割勘の損のゆかないだけは呑み　同
白線の魅力近眼きつくなり　同
拳闘の血へ電髪のおのゝきぬ　廣島　近藤須彌浩
それからか其れから僕は寢た丈けさ　同
勸誘の藝にも似たる鮮かさ　同
嫌はれて居るとは知らぬ顏を剃り　同
嘘をつくとこ丈け俺に似て居ない　同
汽車辨を買うてやう〳〵旅心地　尼崎　飯尾寄與夫
藝人の時計舞台で見せるもの　同

菊人形

人形の股から菊の芽が覗き　同
日向ぼつこ犬のお家と編んで居る　松山　芝田靈子

五　女

女の子産婆と二人して笑ひ　同
妹が先きにこさへたモンペ服　同
劇的の祝言となる赤襷　尼崎　山田南濃路
アパートの棕梠はふきん干されてゐる　同

防空演習斷片

ガスマスクはずしてお乳呑ましてゐ　同
明治節子供の誕生日を忘れ　京都　野口柳太
小學生と一緒列車で風邪を引き　同

小學校の運動會を見る

ゴールまた遙か我が子へ目をつむり　同
せかぬ旅二等は空いて居るけれど　兵庫　戸倉普天
持つて來た卵子も食はす面會所　同
七分搗時代米屋の掛けが氣にかゝる　同
產聲の強さは國の力なり　布哇　長谷川猿吉

少女の死

課せられた事果す迄の命也　同
日本人らしくて下駄履く方がよい　同
月見草これきり逢へぬ手に摘まれ　松山　山岡漫歩
芒の穗未來を語る手に拔かれ　同

義姉男の子安產

國策へ注文通り男の子　同
秋の暮垣なご直す父と住み　東京　田中青風
消ゴムは服にあるまま事務疲れ　同
擴聲機地下に今度は迷兒です　同
緣遠い女中同志のうまが合ひ　大阪府　米本貴志子
金標語喰ひ下るやう變つて來　同
正直な人と云はれて炭不足　同
目禮のまゝで別れた雨の宵　兵庫縣寶塚　森本秋子
花鋏春は嫁いでゆくこゝろ　同
曼珠沙華心の人を尋ねて見　同
駱駝隊みんな眼を上げ首を上げ　海拉爾　小川靜觀堂
金梏樓笑ひに消され佇つてゐる　同
氷柱たいて國旗の竿を正してる　同
農繁もあらは子の垢親の垢　愛媛縣大洲町　米澤曉明
友人の嫁はポストの蔭にゐた　同
掲示板違つた文字が二つ三つ　同
生甲斐を男はつきり知つて征く　大阪　樽井翠花
娘もう相談欄へ投書する　同
現職の旋盤工で當選し　尼崎　江口正路

九二式起重爆機を觀て

人智二十三頓を吹き飛ばし　同
御下賜品ですよ配達の聲高し　同
仲好しがリボンの色をきめてくれ　廣島　立花あき子
原色を着て颯爽と銃後行く　同
水打つて秋のこゝろになつてゐる　同
塗りたての注意なごとは犬知らじ　廣島　河合白外郎
電氣時計が遲れて皆を遲れさせ　同
改築案妻も一口云つて見る　同
移轉の荷最後は秋の夜が冷え　下關　多田市多樓
女の眼眞面目な嘘を言ひそうな　同
善後策他人のもので間に合せ　同
大輪の菊をさがせば孫の胸　大阪　平川久枝
慰安會菊へ白衣の袖がふれ　同
食慾へ娘はスタイルを案じ　同
夕燒の中に小さな汽車になり　大阪　田中風葉
蟻の來る早さを見たり勝手元　同
非常時があほらしくなる百貨店　同
統制の穴の大きい丈け儲け　朝鮮　村野東狂子
叱られぬ事を知つてる獨つ兒　同

見送りへ泣かぬと母は誓はされ　同
時の人寄れば世界が騒がしい　名古屋　鈴木可香
立腹の餘憤に小犬蹴られたり　同
お茶漬の味が分つて角がとれ　朝鮮　高原惡源太
非常時に未だ服裝が物を云ひ　同
眞實を云わずデパート奉仕顏　大牟田　高田抱逸
落目でも虚勢を見せる百貨店　同
いつの間か時計にされた勤嚴氏　堺　麿生リリ
づけ〳〵とした看護婦の白い服　同
病臥てゐても子のお祭りの下駄のこと　京都　八田鐘生
特價品安いことだけ褒めて去に　同
恩給があるから俺は河豚がいや　下關　河村暢爺
霧の中たゞシグナルの灯が青い　同
道連れになつた巡査はくだけてる　尼崎　奥田綠水
夜勤終へ一番電車へ風邪をひき　同
子の名前結局電話帳を採り　愛媛縣大洲町　日柳一葉
鷄を飼つて見るかと百貨店　同
病院へ來ても大阪込んでゐる　大阪　山岡鐵水
卷尺で不可抗力を計られる　同
物乞が名譽の家をはばからず　大阪　夷一笑
出征の向ひに住んでひきしまり　同
夕燒へ明日遠足の子が揃ひ　下關　櫻川不水
遙かなるは貨物船らし夕燒ける　同
秋深し落葉の舞ふを見てゐたり　廣島　岡村郁子
弟の腕白にもう勝てぬなり　同
空巢なぞ氣にせず子供明け放ち　大阪　今西湖秋
風車親の無い子は淋しがり　同
勅語奉讀すんで出る咳　大阪　山川富士
台所ぬけ毛は女中のものと知れ　同
玄海の波へ別れた友の顏　下關　中村九呂平
商用の名刺で廻る火事見舞　同
別紙の通り改正したし物價高　松山　山岡漫歩
外交員金も上手に借りて行き　大阪　堀毛一龜
正確な時計持つ身へ暇があり　大阪　並木南風
かるかやの中で土木の旗が搖れ　奈良　吉田湊万
街燈の明り質札たゝみ變へ　大阪　松本雪舟
製材所聾へこゝろよいリズム　大阪　中原銃人
干柿へ夕日が弱したそがれる　廣島　田窪石鐵
幸福の續かぬ名畫見てゐたり　大阪　辻鳥平

武玉川四編研究（一）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

冬嶺秀孤松

(1) **燈明にゑひすの顔はありの儘**

省二＝惠比須さんの顔は、人皆知るところであるが、燈明がついて拜がめば、一層馴々しい氣になる――惠比須講には、惠比須大黒二神を祭るけれ共、惠比須像の前で「逆桐の開帳をするゑびす講」などの騒ぎをやる。こんな時に燈明でみる惠比須顔は、一しほ惠比須顔。

秋の屋＝夷講を詠んだものに相違ないが、何んだか詩趣に乏しい句のやうである。

東魚＝夷講で神前に、常とは格段に賑かに、供物など飾り立てゝある。あか〳〵と燈明の映える中に、ゑびす樣は常の儘の笑顔で御座るといふ、親しみをもつ心持ちであらう。

(2) **雲水へ大たはに出るわたし守**

省二＝雲水僧を一所に載せて渡がでる。渡守の雲水に對する態度、大たばが中心の句

秋の屋＝渡錢はいらぬと、大束に出る。

東魚＝はかない渡守の身分であるから、僅の賃錢をサービスしてやつた事を、大たばと興じた朗らかな句。

(3) **二王か出來て赤い夕暮**

省二＝眞赤に色彩られた、二王に夕陽がさす。あたりが何んとなう、明るい氣になる。

秋の屋＝先年日光廟の建築物が修理されて、仁王の像が眞赤に塗替へられたのをみて、私は頗る俗惡であると感じたことを、此句に據つて憶ひ出したが、仁王の像などは、少し古びて褪色した方が、有難味が有るやうに思はれる。

東魚＝あたり迄が、凡て赤いやうにみえ、感じられるのである。

(4) **いんきんに成た夫か氣に掛り**

省二＝この御亭主、大にやつた方なのであらう。それが、大變慇懃になり、却てどこか感じがピッタリせぬ樣にも思はれ、ハテ、何にかあるのではなからうかと、氣を廻し配るのも女房らし。

秋の屋＝例の格氣が少し手傳つて居るやうだ。

東魚＝何かしら溝が出來たやうに思はれるので、いつそ、ぞんざいな口をきいたりされる方が、却て親しく思はれる心持ちであ。

(5) **魔のさす文を筋違に遣ル**

省二＝吉原文使の句に、「文使息子をはすに呼出し」。斯る魔のさす文は、正々堂々と手渡しはなし得ぬ。人目を盜み機を計つて横から渡す。

秋の屋＝二度の月見か八朔か。

東魚＝人目にかゝらぬ樣に、眞正面から渡す事の出來ぬ文では、魔がさゝずにはゐない。

(6) **濱屋戰筆を紙れは塩はゆき**

省二＝作り過ぎと云はれても致し方なき句。用をたす爲に、筆の尖を一寸かむだら、塩はゆかつたといふ、輕い即興性をねらつたのではある。

秋の屋＝これは事實でなく、机上で考案した句で、莫迦々々しい句である。

東魚＝私の今居る假住居（四國新居濱海岸）は水が塩からい。茶などは塩茶をのむやうで、何かしら他のものも、塩からい氣がする。此句も「樣に感じられる」程度にとつてよろしくはあるまいか。

(7) **哀なりけり金を苦にする**

省二＝金は天下の廻り物。持たざる者も苦にする要なく、持つ者誇るに足らず、亡ぶる時もある。（禪坊主のお談義のやうだ呵々）此句は後者の場合、金持ち却て金の番に苦勞し心配する。哀なりけりだ。

秋の屋＝食はず貧樂といふ諺の如く、貧者の目からは、富者は哀にみえる。

東魚＝とられる物のない連中は、全く氣樂なものだ。

(8) **鵜の面ラは人の心の外へ出し**

省二＝類詠「鵜の面は凡慮の外の所へ出し。」よくみて居れば此句の通り。

秋の屋＝鳥といふ水鳥も又、此句と同じ。

東魚＝「凡慮の外」といふ方が、句が派出であるが、「人の心の」のなだらかさも、惡るくはない。

(9) **洗髪脇の下から人を呼**

省二＝「脇の下から」が妙趣。洗髪の古句には穿つたものがある。「洗髪にぎつて袂みて貰らひ。」

秋の屋＝「人を呼」も大に働いてゐる。佳句

東魚＝寫生的な句の上乘なもの。

(10) **姿見に用のなき身と也にけり**

省二＝昔は女三十にして姿見などに、用のなき身と謂はれたもの、「三十に成ると女の世がすたる」（武3）であり、「四十から腕をみれば腹がたち」（武6）である。

秋の屋＝負うた兒に抱いた兒、腹にもまだ未成品が一個、姿見に向ふ隙もない。

東魚＝前句から離れては、平凡な句としか考へられぬ。

(11) **額を拔くとやせる總領**

省二＝額が廣くなつたので、何んとなう瘦せた面持のやうにみゆる。惣領振りと云はんか。

秋の屋＝「額を拔く」は、元服して前髪を剃落すの意であらうが、疲る意が少し判然しない。大人びたのを斯く云つたの歟。

東魚＝面長がに見える處が、瘦せたと感じさせたのであらう。

省二＝「十六歳元服の時小く半月形に額を拔き上げたり」（守貞漫稿）

(12) **芋の葉へ書く梶の下書**

省二＝類句「梶の葉の下書芋の葉へ書いてみる。」七夕に梶の葉へ歌をかき二星に供ふ。「梶の葉へちらした家の松花堂。」硯の水は芋の葉の露を入れる風習である。

秋の屋＝頗る作爲に過ぎた句で、芋の葉に文字が書けるであらうか。是れは疑問である。

東魚＝芋の葉には墨がのりさうには思へないが、乾いたらまんざらでもなからうか。芋の葉へ書きもしやうか、その下書きはで、兎に角下書をする處がヤマである。

(13) **傀儡師おのれか舌を切に出シ**

省二＝傀儡師の變遷に就ては、畫證錄に詳し。「南水漫遊に傀儡子昔は西宮拜に淡路島よりも出し、ゑびすめ、鯛を釣り玉ふ仕形をして春の初に出ける故えびす廻しえびすかきともいへり。江戸の方言には山猫と云、人形廻して末に山猫と名付て鼬の皮を出して小兒をおどせし也。」首から胸に釣つた箱の上で、人形を使つてみせ、終りに鼬の皮を出し

て叫むだ。「傀儡師いたちのやうなものを出し。」「けだものを一匹まぜる傀儡師」で、己が舌をも出したりして、小兒達の相手をした。

秋の喜＝一寸おどけて見物に對ひ、舌を出したのであらう。

東　魚＝無邪氣な句で、好感がもてる。

(41)　**蹈れた形て醒る明店**

省　二＝醉漢、醒むれば身は明店にあり。寢込むまでのいきさつが「蹈れた形」で現はされる。

秋の屋＝前夜野狐に誑かされたなどゝ、昔の人はよく云つたものである。

東　魚＝奇警な表現である。うつ伏せに醉ひ倒れてゐるので、所謂ギュウタ蛙の樣になつてゐるので、それが明店だけに面白い。落語にありさうである。拙吟「飲んだくれどうでも車庫で寢ると云ふ」を思ひ合せ失笑。

(15)　**親類のそろ〳〵逃る十二月**

省　二＝敬遠される。―親類とはいへ餘り度々では。

秋の屋＝況んや朋友に於てをや。

東　魚＝人情紙の如し。「仲の良い親類金のない同士」と云ふ句が「獅子頭」誌にあつたと思ふ。

(16)　**行そうな顏のすくない念佛講**

省　二＝念佛講の講中、夥多集つて念佛を營む。「蚊ふすべの中に聲あり念佛講」（來山。）講に集まる程だから、死にさうな顏も少い筈ではある。――「死にさうもないで念佛講を退き」これは講員が毎月の掛金中から死者があつた時は、香奠を贈る組織などであつた。當分自分は死なぬからと脫退。

秋の屋＝お前百までわしや九十九まで、阿彌陀樣の御側へ速く行きたいとは、只口ばかりで心には無いのである。

東　魚＝口だけ死にたいといふ婆さんは、隨分ある。

(17)　**玉のうこかぬ庫裏の十露盤**

省　二＝庫裡には大きな十露盤が、釣つてあつたりする。玉が動かぬわけのものではないが、餘り用ふるのでなし、動かぬかの感じがする。それ丈け大型でもある。

秋の屋＝近頃の坊主達は、珠のよく動く算盤を控へて、金儲に腐心してゐる。

東　魚＝實際動きにくゝもあるであらう。面白い句と思ふ。

(18)　**馬てさへ見せに行日の前後**

省　二＝馬市へでもゆく場合か。相應手入れをして小綺麗にして行く。馬で「さへ」を背景とした作。

秋の屋＝馬子にも衣裳といふ諺があるから馬にも相應の化粧をせねばならぬ。

東　魚＝「前後」ほうまい文句。その滿艦飾振りが、目に見える氣がする。

(19)　**雲隱を戻れはもとの物わすれ**

省　二＝雪隱は物を考へるによい場所、よくものを思出す場所とされてある。然し出てみれば元の物忘れで、雪隱へ置いてくるのであらう。「も」の字の韻を踏むで居る。

秋の屋＝雪隱を三上の一とか云つて、物事を考へるには、實に安意の場所である。此のやうに頭韻を用ひると、句が流暢になつてよい。

東　魚＝奇智的な句であるが、暢んびりしてゐる氣分がよい。

(20)　**影膳の心のうちに貌か見へ**

省　二＝影膳を供へる眞心に對しては、自ら顏が描き出さるべきである。

秋の屋＝現代ならば寫眞を飾るのである。

東　魚＝「心のうち」には、何んでもない言葉だが、しみ〴〵させるものがある。

(21)　**淀屋の隱居隱居てはなし**

省　二＝淀屋橋を架した淀屋亘庵を祖とする、淀屋辰五郎を詠むだもの、彼は豪奢な生活をなし、數奇な生涯に終つた。

秋の屋＝淀屋一家には複雜した事情があり、遂に罪を得て、三都を追放されたのである故、世間普通の隱居ではなかつたのである。

東　魚＝隱居と云ひ條、樂隱居ではないといふのか。豪奢の匂ひの殘つた隱居ばなれのしたものと云ふのか。

(22)　**關取の質は流れて怖かられ**

省　二＝苦情を持込まれては。

秋の屋＝着物の裄丈が、普通のものよりも大きく長いので、それを見て怖いと云ふので、流質の苦情を怖がるのではない。

東　魚＝秋翁鋭に贅。不氣味な程大きい。

(23)　**面白い役に當ツて駒むかい**

省　二＝駒込ひの役に當つたのは愉快である。八月諸國から曳きくる駒に對し、左馬、の役人が牧へ出て迎ふのを駒迎といふ。「駒引や沓打かへて都入り」（吟江）

秋の屋＝現今の軍馬徵發と同樣であるが、官尊民卑の時代には、駒迎の役人は面白かつたらう。

東　魚＝駒迎とは面白き役に當つた事であるわい、と云ふ意味を、斯く表はしたのであらう。

(24)　**後悔のまた有うちは貧乏也**

省　二＝後悔の愚痴などを、繰返して居るうちは、まだ〳〵貧乏性はぬけぬ。（全然諦めてしまへは貧福超越ヂヤが）

秋の屋＝貧福超越などゝいふ事は、聖賢の域に至らねば出來ぬ。

東　魚＝後悔斗りしてゐるやうで、相も變らぬ貧乏と云ふ意であらう。

あらゆる趣味のお稽古場
手はじきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達
松坂倶樂部
會員募集
お稽古種目
長唄　常磐
清元　小鳴
津軍物唄
尺八　舞能
箏曲　謡曲
ピアノ　ヴァイオリン
日本舞踊　茶道
料理　華道
道理　柳句
氣棋　學道
松坂レコード吹込所
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
松坂倶樂部七階
電話(代表)三〇〇三番
松坂屋
大阪　日本橋

同舟近詠

たぬき　松山　前田五健

平凡に飼はれて狸よく眠り
狸とは馴染と和尚木魚打ち
ぼんやりと月を見て居る狸つき
化け狸うつかり尻尾忘れたり
童謡の狸きまつて腹つゝみ
本當に醉つて狸は捕へられ
狸だろ犬だろ夜釣脅かされ
拜殿に狸が居たと神無月
雨か落葉をふむは狸ならん
化け方にいつも狸は昔風
ヒョロ〳〵と狸に似た子傘さして
人の名で呼ばれる狸侮れず
落葉しきり狸戰さに行つたとか
山の溫泉でこゝへ狸が參ります
狸棲む架線に邪魔な樹が伐れず
樂屋番劇場の狸に馴れて居り
七化けも無し國策に沿ふ狸
ハイキング狸の話聞いて來る

料理屋のたぬき時々洒落をき、
狸でも出るか山雨のあかるさよ

氏東縣御影町　長崎柳秀

世渡に下戸では困る時もあり
假名づかひ子に教はつて褒てやり
郊外の風を知らずに親は逝き
風上にをけぬ男の世辭のよさ
絹夜具で暮す女にヒスの癖
不孝とは見えずレビューに足を上げ
還暦になつてもやまぬ酒の癖
お妾の起き拔けへ來る京染屋
貸家の札に過ぎてる應接間

廣島　濱田久米雄

小說のもう失戀となる活字
新婚が四五組もゐて三等車
旅房りへちまの水が溜つてる

國弘半休君任官

襟章は興亞の色に映えてゐる
女事務笑へぬ人になつてゐた
デパートへ行く女房の下駄があり
インキ消し僕の頭を疑ふた

今治　長野文庫

謡本毎日同じとこをあけ
盃に休む暇なく女給注ぎ
ラケットを持てば課長がコーチされ
學生の帽子の汚れ伊達の內
その邊にある筈ですと古本屋
背中まで覗けるやうに藝者着る
奥樣が石嚙み米屋叱られる
成上り意味も知らない南畫買ふ
大阪辯仕入係を誘ひ出し
出張員晝飯拔いた分も呑み

神戸　潮田明坊

屋上のベンチはスクォアー板に向き
長男のきつい言葉に母が泣く

堺　渡邊曉童

地下鐵へ傘を忘れたあわてやう
老衰の圖でエスカレーター停止
大阪の陽の入りも又美しい
十二月二十九日で定期切れ
女店員人形にも似た頬の良さ
葬ひの列を亂した木炭車
大阪は急がば廻れではすまず
お辭儀位何のたしにもならぬなり
奇遇同士小使錢は持ち合はず
大阪辯に成りかけた子をいとおしむ
電車賃別々に出す香具師夫婦

宮崎縣　橋本克海

商人であつたと心もち直す
空襲のサイレン勿體ない寢床
統制は新店ばかりいぢめ拔く

川・協

★師走川柳大會準備委員會

十一月十八日夜師走川柳大會第二回準備委員會を南區疊屋町カナメ食堂階上に於て開催した出席委員は左の通りである。堀口塊人(昭和川柳社)小西落丁、上田朴堂(三越川柳會)河野夜王、土居頑童、朝野光路(蟷螂川柳社)梶文葉(鶴橋川柳會)清水白柳子、菊澤小松園(このみ川柳會)戸田孤蓬(松坂倶樂部)麻生路郎、水谷鮎美、丸尾潮花、飯尾寄與史、永田里十九、酒井斗風、黑川紫香、姫田夕鐘、須崎豆秋、渡邊曉童(川柳雜誌社)

★師走川柳大會役員決定

十一月十八日師走川柳大會準備委員會に於て左の如く役員を決定した。(敬稱略)

▼委員長麻生路郎、▼副委員長小川百雷、河野夜王、▼司會者中西おさむ、▼受付係黑川紫香、村松夢裡、山田南濃路、清水白柳子、岩橋双虎、多田一波、田中風葉、畑田よし江、▼會場係丸尾潮花、西田艸樂、小西落丁、朝野光路、高橋かほる、西尾青一路、後藤青兒、大西八歩、田邊由布、北山悟郎、品係姫田夕鐘、上田朴堂、土井頑童、菊澤小松園、妹尾八九滿、酒井斗風、飯尾寄與史、岡崎はるを、▼會計係正本水客、麻生葭乃、▼庶務係渡邊曉童、▼選者係奥村丹路、▼進行係永田里十九、戸田孤蓬、▼記錄係岡田某人、▼ゲリラ記事係下村四呂平、▼連絡係須崎豆秋

★司會者鮎美氏に變更

師走川柳大會の司會者中西おさむ氏は近く東上するやも測り難いといふ理由で司會者辭退を申出られたので水谷鮎美氏に交渉快諾を得た。

ちゃんとんかつ
ちよ
店
湖月
市地法善寺境内

高瀬歯科醫院
特科——
レントゲン・紫外光線
高瀬志可
東區內北濱心齋橋筋角
電話 東四四一九番
北濱一九二三番

演藝映畫に川柳を觀る

映畫「殘菊物語」

岡田某人

幽靈火舞台ひとゝこほの青し
戸板返し家號短く呼ばれたり
大根の眉が綺麗な舞台の灯
追從の聲を扇子で分けて出る
皆嘘の世と知り初めた夏羽織
藝事の意見思はぬ口から出
云ひわけはきかず婢へ暇が出る
あゝこれが戀か女のくづをれる
添ふ覺悟意見する灯をまともに見
出てゆけと云ひ切つてさて座に堪えず
苦勞人もう留めませんやんなさい
發車ベルまさかと思ふ人が來ず
まあえゝがえゝがと座長受つけず
悪評を背につめたい草履はく
樂屋裏はるばると來たひとが待ち
戀なればこそ路次へ去ぬ足輕く
路次の闇男いとしいとこに住み
佗び住みの男いとしや窓一つ
羽織掛け昔はひとにかしづかれ
男住居をんなの疊んで臭れるもの
どつこへもやらぬ思ひの火を起し
ふたありで强くゆく氣の眼が出逢ひ
鏡台が屆き世帶の色となり
鏡台へ舞台ふむ身の坐りやう
旅四年不運のまゝの樂屋の灯
ふて寢ふとあれも不憫と氣付たり
不運又別な不運へ起きなほり
もう誰にも頼らない氣の掛け蒲團
さからふて來て頼み込むのも女
云ひにくい覺悟うながす男の氣
男對男友情地に墜ちず
樹の靈の廓なまりも歌舞伎の夜
足許のおぼつかなさも奈落の灯
男世に出して女にある涙
今はもうすがりつけない人となり
置き手紙譯を知つてる手が渡し
今頃は何處の夜にゐる置手紙
獨り歸る戀のふる巢の破れ疊
身をかくす階下は按摩の親娘
舞台いま獅子の狂ひの色のあや
乘り込みを待つ灯が搖ら浪花の夜
あゝ戀の故郷あの橋あのあかり
嫁と許す聲もにごらぬ親心
見舞つてやれと親の本心
この路次へ袴ふさはずもどつて來
晴れて呼ぶ夫の名なり涙ぐみ
死ぬなよと本當の聲で履く草履
さんざめく浪花、芝居はあのあたり
浪花いま船乘込みの灯にまみれ

映畫「土と兵隊」

渡邊曉童

子を思ふ雲は故國へつゞくなり
なんとかいつては兵隊乾杯し
歸つた〳〵十三人が一人缺け
軍靴のリズム行手の果てしなし
月下放屁笑はすつもりには非ず

映畫「僕は誰だ」

田窪石鐵

星二ツは二等兵なり漫才師
愛人の心を試すための金
千圓で到々卒倒してしまひ
百廿五件は探偵長のウソ
地球儀廻し多忙の眞似をする

北野劇場

新國劇公演

姫田夕鐘

麥と兵隊 二幕五場

死闘の前夜葱を洗ふてる
血便を話す兵士へ麥の延び

人生劇場（吉良常篇）三幕五場

遺言の通り粗末な墓に寢る
戀の爲人を殺すを躊躇せず
アル中の先生死人の横で飲んでゐる
一生は小説でした日の最後

忠治と頑鉄 二幕五場

掌へ小判を殘し旅鴉
靈二つ無法の武士を憤り
劍客の惱まされてる靈二つ

映畫「女の教室」

渡邊曉童

おかしきまでに愛の巣のたのしくて
愛すればこそのセンチと成つゆく
もどかしい汽車を悲劇が待つてゐる
奇遇やがて雨のテントは夜と成り
おそろしい程の奇遇に抱き合ひ
友の戀かばえぬ人の世のおきて

歌舞伎座を觀る

獅子文六原作「斷髮女中」三景

水谷鮎美

斷髮の女中も飯が焚けるわけ
カロリーを云ふて主人を凹ましる
物干の影はハッキリ斷髮だ
陽のあたるとこで空想ばかりする

（劇評）

姫田夕鐘

全面に通じてユーモアに始終して柳味が覗いてゐる。役々では適材適所で主演の水谷のアケミは淡々たる台詞廻し、藝に寸分の隙もない熱演、助演の山口、嘉久子、菊波、清水もそれ〴〵カラーを良く出して舞台を明るくして觀客を引付けてゐた。近來の佳作編として推奬に價する。

八木隆一郎原作「海の星」二幕

姫田夕鐘

船世帶父子の飯の湯氣が立ち
獨酌へ大海原は波靜か
さゝやかながらお通夜を船でする
横面を殴られ損の女將なり

（劇評）

水谷鮎美

井上、水谷の名コンビなれば悪からう筈がない。アクター對アクトレスと云つた感じは更にありません月の港にひとりさびしく座る晩酌の味はいゝ老境である。八重子の酌婦ヤスが地方語をうまくあやつゝて達者なところを見せてゐる本役である。筋は一情景なれども俳優によつて如實に生きてくるものである。山口の豪膽な板一枚下を地獄で暮す男が井上を快活に誘惑にくるところ男同志の腹藝であつて實け役だつた。酌婦らの女優軍のマニアにすてがたいものがあつた。井上は新派のエキスパートである。

伊原青々園原作「小梅と一重」二幕

水谷鮎美

粉雪が降り芝居茶屋灯があかし

姫田夕鐘

剃刀が嫉妬の双と變りゆく
思案する傘一本の夜道なり
濱町にちよこなんとゐる人力車

（劇評）

夕鐘「假名屋小梅劇は古いと言へば古いきらひはあるが此度の渦卷なんかと意味が違ふと思ふ。やはり濱町の兼吉殺しの場など新派の型物ですなあ一幅の繪と云ふところです」

鮎美「そうです。兼吉殺しの場がヤマです。ですがそれまでのいきさつに何共言へぬ明治ものゝ味味がありますね。そして引かれゆく小梅の伊達氣分も味はねばなりませんね」

夕鐘「此の劇は實在であつたのかも知れませんが筋としては好感が持てぬ。あまりにも小梅が浮氣なので……」

鮎美「事實あつたことを劇化したのだとおぼえてゐます。花井お梅と云ふ藝者が箱屋兼吉を殺したのです（先輩の書物で見る）」

夕鐘「芝居茶屋うた島の河合、喜多村の至藝のやりとりは後世に殘る型だと信じます」

鮎美「いゝですなあ、同感です」

ロッパ劇を觀て

於 北野劇場

山本葉光

更生の歌

夕映がさし込み鍛冶屋腹が減り
秀一つ舞台効果を知つてゐる
投身を按摩の笛が邪魔をする
巡禮が次々通る春となり
同情に甘えず傷痍兵强し

ロッパ世界ニュース

大辻のホクロも派手な青い服
漫談は舞台をつなぐ幕の外
日本の佳さを帶から褒め始め
容姿にスパイ自信持つてる

大毎國際ニュース

ヒットラーになり切る髭で熱を上げ
みな踊りみんな歌つて幕となり

續清水次郎長

浪曲で筋をはこばす豆煙管
孝行に堅氣な姿でやくざ來る
親分の型で別れを惜しむなり
四十年過ぎる樂屋のいそがしさ

ロッパの愛染かつら

名案へ嬉しい聲は遠慮せず
早がわりロッパの聲帶模寫が出
恥かしい二人に花輪むしられる

映畫「第二の出發」

田中青風

老父たゞ醫學士だけの望み持ち

▲武田發賣品

感冒頭痛に ソボリン

現代の藥理學上最も進歩したる感冒頭痛藥です

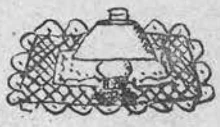
【主治効能】感冒、頭痛、神經痛、ロイマチス痛、齒痛、神經衰弱、ヒステリー、船車暈、結核性微熱等

優秀なるヒラツオロン誘導体にアミノピリンとバルビタールの分子結合体を配しその鎮痛解熱効果は藥物相乘作用により各成分の總和より遙かに强大となつて現れます

【價格】三〇錢、五〇錢、一圓、二圓、三圓五〇

各地藥店にあり

發賣元 株式會社 武田長兵衛商店 大阪市道修町



川柳 **解題と例句**

＝路郎編＝

(11)一燈園

★一燈園といふ建物は、もと京都市左京區鹿ヶ谷にあつたが現在では東山區山科四ノ宮の光泉林地内にある。後寮の前からゆるい坂を二三十歩北へ行つた東側にある二階建で、建物としては極く質素なものだ。現在でも一燈園同人はこゝを中心に托鉢に出てゐる。

★一燈園では、自然にかなうた生活をすれば人は何物をも所有しないでも、又働きを金に換へないでも大丈夫生きられるものであるといふ信念のもとに、常に懺悔の心を以て無所有奉仕の生活を徹底して行じてゐるのである。

★一燈園生活は今から三十餘年前に西田天香氏が唯一人で始めた生活法であるが、その後次第に同人が殖えて大正二年に鹿ヶ谷に一燈園といふ建物が出來たが昭和五年に一たん取毀し保存してあつたものを昭和十一年の春、原形のままで、現在のところへ再建したのである。

托鉢のその前身は借りだらけ　路郎

法喜の嘘に放れた姿を見　同

月まどか一燈園に來てゐます　同

子を棄てゝ來た筈一燈園の夜　同

合掌をされて視察がてれてゐる　同

托鉢といふ法もあり生きてゐる　同

煙草の値上げ

政府は明年度を期して中央、地方を通ずる税制の根本的改革を企畫し間接國税においても生活必需品を除く商品に對し消費税、物品税の全面的引上げを行ひ税制改革によつて約七億五千萬圓の増收を擧げようとしてゐるが、これと並行してかねて煙草の値上げを考慮中のところいよいよ十一月十六日付大藏省告示をもつて大衆品たるバットをはじめ平均一割四分の値上げを斷行することに決し、十五日午後十時大藏省から左のごとく發表された、今回の値上げは昨年一月につぐ第九回目のものである。

製造煙草改正定價表

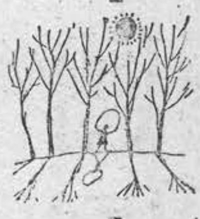
名稱	包裝區分	改正定價	舊定價
國華(二〇本)	…口付紙卷煙草…	四〇	三八
敷島(二〇本)		二五	二二
みのり(同)		二〇	一八
朝日(同)		二〇	一八
錦(同)		一七	一五
響(同)		一四	一二
カメリヤ(同)		一四	一二
	…兩切紙卷煙草…		
コハク(五〇本)		三、五〇	三、〇〇
同(二〇本)		七〇	六〇
扶桑(二〇本)		四〇	三五
ホープ(五〇本)		一、五〇	一、一〇
同(一〇本)		三〇	二二
チェリー(太卷)(五〇本)		九〇	七五
同(一〇本)		一八	一五
光(五〇本)		六六	五五
同(一〇本)		一三	一一
ゴールデン・バット(一〇本)		九	八
さかえ(二〇本)		一八	一六
曉(二〇本)		一七	一五
ほまれ(二〇本)		据置	一七

(評)値上げについての可否は云はない。云はなくても判つ

「凩や」の辭世問題に關聯して

――病室手帖その二――

・蛭子省二・



百樹氏の「初代川柳凩の辭世は後人の僞作なり」(「番傘」九月號)が發表せられた後に續いた「木枯の遺吟について」(久良伎翁「番傘」十月號)、「ふあうすと」十月號の川柳山脈欄及び「遺吟問題に寄せる」(東魚氏「番傘」十一月號)が切拔かれ一括して私の病邊に置かれてある。數日前來急降下した寒氣に苦惱を增し、全く氣力を喪つて居るのであるが、辭世吟の事とし云へば身につまされる。一言仲間入りをさせて頂く。

永年川柳壇に關與せられ多大の貢獻ある百樹氏が、百五十回忌に際し敢然意を決し、年來の疑問を問題として提供された勇氣に深く敬服する。凡そ發表には機會があつて以て私共をして十分留意せしめ、研究的回答をせねばならぬ責務を、強く痛感せしめる。「何時も川柳忌を目がけてこの說が頭を擡げる」のは可怪しく辛らいなどと、感情的に讀み始める事は百樹氏を毀ける。而して久良伎翁東魚氏山脈子等の反駁にも亦敬意を表するのであるが、「この說を覆すに足る文献の出現した時は、潔く兜を脫いで降服する」(百樹氏)との文献要求に對し、悉くが感情的常識に――(例へば「感情的に、あの遺吟を祖翁の遺吟として認め來たつたまゝに認め親しんでゐたいと云ふ心持ちとから、抹殺說早尙、尙進んで撤回を求め度いと思ふ」東魚氏の如く)――終始されて居るのだから、恐らく百樹氏は滿足して居られぬであらうと察する。然し此問題はいかに急いだところで手早く解決のつく筈はない。今迄にさへ餘りにも文献が乏しいのだから、新文献發見は容易ならず、いつの事か判りもせぬ。やむなく、やはり判つて居る文献の再檢討をするより外はない現情では確證は一寸得にくい。故に伎翁の『傳曰く初代川柳辭世として公認してゐる次第である」となり了る。――再建された龍寶寺内の句碑には太祖翁柄井川柳遺詠後學川柳久良伎謹書とある以上、僞作であつては伎翁の面目もが潰れる――私は舊派の人々が辭世として、書き傳へて居るから信ずるものであつて、恐らく明治代新川柳に參加した人々悉くがさうであらうと思ふ。今の處は外に手はないのである。だから「文献要求」は無理らしくも思へるし、又研究心への刺戟として、冷靜に考慮し得るを喜んで居る。

龍寶寺(天保)句碑に就て、柳亭種彥は「其祖の柳枯てはや五十年に到りしとて又新に碑をいとなみ」と書いて居る。これを以て當時の有名人たる種彥は太祖遺詠と認めて居たものだと推考するのだ。私は種彥を信頼するが故に、願主五代目の業績をも承容して居る。が、百樹氏は「天保十年龍寶寺の建碑に當つて何人かによつて、さかしらの僞作になつたものと見るの外はない」と云つて居らるゝ處に、斷然見解が分岐し問題化するのである。後日を待つ事にしよう(この項つゞく)

隨筆 **御時世**

小山文三

東京の三越に草鞋が一足拾五錢也の正札付で賣出されてある。同じ所にハイカー用の柳行李の辨當入れが六十錢で賣り出してあつた。三十年前には田舍の學校の運動會や遠足には皆此草鞋ばきであつたし、當時の中學生なぞも柳行李の日の丸辨當で通ひつゞけたものであつた。今更三十年前が思ひ出される。

○

田尻稻次郎博士が藷飯を推賞されたり、二木傅士が玄米飯を提唱されてからでも既に二十年以上を經過してゐるであらう。近頃になつて半搗米だの七分搗だの、玄米食だの、芋飯、粟飯馬鈴薯飯だの隨分騷がしくなつてゐる。何事でも足許から鳥が立つものであるらしい。

○

センブリだの、ゲンノショウコだの、オーバコなぞの野生の藥用植物が近頃盛に採取され初めた。顧みられなかつた棉が三四十年振りに畑を賑したり、稗が飼料として奬勵されたりしてゐる。大地を確り踏みつける閑さへない氣ぜはしさである。

○

街頭にネオンが消えるし、電車内の電燈では新聞が讀みにくいし、瓦斯ストーブなぞ無論遠慮を要するし、蠟燭や、燈油や薪なぞが浮び上つて來るだらうし、自家用自動車なぞに反り返つてゐるよりも、人力車で走らせてゐる方が國策に副ふ憂國の志士(?)に見えて崇敬の的となるかも知れないのである。

○

電氣時計は卷く世話もいらないし、時間も正確である事を誇つた時代は過ぎて、凡そこれ位厄介な存在は無い樣な憂目を見せてゐる。寫眞のフヰルムが無い位の事は一部の人の辛棒に任せるとしても比較的卑しまれた木綿物が衣類の中で一番貴重

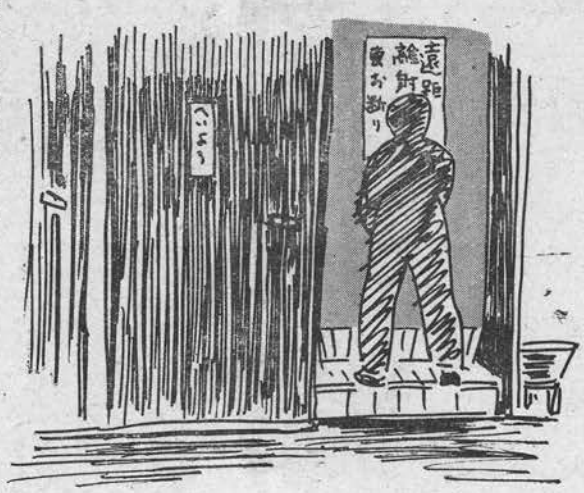
Sata Special Klinik
呼吸器病科
内科
診療 毎日午前
醫學博士 佐多愛彥 電北33
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎 電尼崎1151
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電北八二八四

てゐるだらう。バットが九錢になつた。金色の燦然と輝いてゐた光りが消え、函が小さくなつてパイプが無くなり、散々バット黨の眉をひそめしめてからの値上げだ。あんな小刀細工をしないで値上げするものなら、もつと早く値上げした方がサッパリして、よかつたかも知れぬ。役人の苦心も相當なものがあつたのであらうが、煙草は米と違つて

（評）一ト口に官吏と云つてもピンからキリまであつて、下級官吏に停止令はどうかと思はれる。近衛公の云はれる官吏とは上層の官吏の話であらう。それ等の人たちの榮達主義は實際目に餘るものがある首相、陸相、海相は勿論各大臣は一度戰線に飛行機を飛ばす位な努力はあつて欲しい。遙か後方で衣冠束帶で下知してゐるやうでは外交がテキハキやれそうな筈がない。これでは榮達主義を云々されても返へす言葉はあるまい。舉國一致は身を以てしめすに限る身を捨てゝこそ浮かむ瀬もあれか。

漫畫陣中鏡

中支　北　みきを



×月×日　便所にはいろ〳〵の貼紙がしてある。小便所には「遠距離射撃お斷り」大便所へはいると「よく照準して……」等々、どこまでも軍隊式で要を得てゐる。軍隊用語を廣告文案等に應用してみるのも一案だと思ふ。

嗜好品だ、世話女房式じゝむさい小細工は不愉快だ。

近衛公の車中談

十一月三日、西下の近衛公の車中談に「僕は經濟方面のことはよく解らぬが、いろ〳〵と考へられる――たとへば賃金俸給などの停止令にしても官吏は單に自肅するといふだけで停止令が適用されないなど――官吏の俸給はよすぎるやうだね、それに官吏が榮達主義であることは國家のため全く嘆かはしいことだ」云々

赤十字七十五周年

十一月十五日を赤十字條約成立七十五周年記念日として各種の記念郵便切手や記念スタンプが作製された東京芝の日本赤十字社では二十日に篤志看護婦人會創立五十周年記念式典を擧げ大阪陸軍病院では六日に七十周年記念祝典を擧行した。

片假名と川柳

前山北海

我々のやうに海外に長く住んでゐる者には日常の言語に相當英語が使用され、場合によつては日本語を使用する事によつてよりも英語で表現した場合の方がぴつたりとくる方が多く、無意識に斯うした英語を會話に挾む習慣となり、偶に故國でも訪問した場合には斯うした習慣から色々な悲喜劇を演じた例は枚擧に遑がない位である。

從つて川柳する場合に於ても斯うした英語を日本語に譯したのを使ふよりも其儘英語を片假名で書いた方がしつくりする場合が多く、米國や布哇の川柳家の句に片假名の名詞、動詞又は形容詞まで使用されてゐるが、時に斯うした片假名入りの川柳が海外から投句されて柳誌に掲載される場合、或は誤植により又は御丁寧にも漢字に直されたりして、似てもつかぬものとなり、折角の句が臺無しになる場合が往々ある。

斯うした例は最近の私の句に嬉しくも首が廻らぬ花のレイな、得難い品になつたりするのだから、全く御時世なるかな！である。（一四・一一・五稿）

英字紙も汕頭落ちたヘドライン

と詠んだのを「ヘドライト」にされて悲觀したことがある。ヘドラインは敢えて說明を要しないであらうが、「レイ」とは古來布哇人が賓客の送迎に「アロハ」の意味を含めて贈る首に掛ける飾り輪である。錦衣歸鄉の船上で知己友人から澤山な馥郁たる芳香を放つ花のレイを首が廻らぬ程に掛けられて嬉しくはあるがちと苦しい微苦笑させられてゐるレイが禮になつた譯である。因に「アロハ」は誠に重寶な親しみ深い布哇語で歡迎及び歡送の兩樣の場合に使用される。

「同舟近詠」に布哇から特色ある川柳を毎號寄せてゐる我が川柳ウイロー社の大先輩高澤一浪老の句には我々が日常使用してゐる英語や布哇語が盛んに使用されて一種特異な風格を見せてゐる。近詠から拾つて見ても

一世のハッパ語レビューそつちのけ

ホーハナの一生だつたカナカ色

第二世カナカパケーの血も流れ

があり、移民地たる布哇の特異性を詠み諷刺してゐる。此の場合の片假名は全くしつくりと布哇のローカル・カラーを表してゐるのもさすが一浪老と感心させられる。

ハッパ語とは日本語に英語を混ぜたり土人語をミックスしたりするチャンポン語のことであり、愈々解らなくなると手眞似や足眞似でまるでレビューそつちのけとなる。ホーハナとは鍬で雜草を除く蔗畑の勞役であり、最初契約移民として渡布した我々の先輩の多くは一生を耕地勞働者として終り顏色もカナカと呼ばれる布哇人同樣な褐色な日燒けした顏となる。第二世となると雜婚も次第と盛んになり布哇人（カナカ）やパケーと土人語で呼ばれる支那人などゝも結婚して斯うした異つた血も二世の間には流れる樣になる。コスモポリタンな布哇では祖國の交戰をよそに各國人種が皆お友達であり、日本などでは想像もされぬ樣な和かな風景が展開されてゐる。布哇では言語ばかりでなく生活の樣式も又ハッパ式となり、日本式に米國式がチャンポンにされてゐる。

チャンポンと云へば日本が代表する東洋の精神文明と米國の代表する西洋の物質文明とが太平洋の布哇でミックスされてゐる。うまくミックスされて兩者の長を採り短を捨てゝ進んで新らしき太平洋文明の創造される場合最も重要な役割を演ずる者こそは我日系市民に他ならない。斯うした前途の希望に對して我々は日系市民へ大きな期待を持つてゐる。

日系へ期待大なり新文明

戰線に拾ふ

北支　月原宵明

◇

戰場で他部隊と逢ふ時その兵隊の訛りでどの地方の人だと云ふ事が判りこよなく懷しみを覺える。戰線のユーモアは訛りから生れる。訛り丸出しの兵隊はいかにも素朴で頼もしく勇ましく餘猶があつて親しみがある。

髭の中尉殿が突然「そぎやん事なかばい」とやる。軍曹殿が電話で「モーシモシ」とやる。ハハア九州の人だなと思ふ。

黃河決潰當時の事、突然一部落の土壁から一齊射撃を浴せられた。「分隊長殿やりまよか」擲彈筒を携へてゐる一兵士が事もなげに云ふ、「そやな……。エーいてしまへ」「オイ〇〇いこでー」ドカン〳〵とやる。こんなユーモアを交へた彈丸が飛んでゆく敵の周章狼狽は想像の外である。

◇

「トーフ、トーフ」、ハツとし

て衛兵下番のまどろみから醒めた。忘れかけてゐた懐しいものを聞いた。それは内地の日曜日の午睡に聽く賣聲だ。然しここは背嚢、雜嚢、水筒、防毒面と吊れるだけ吊り下げた支那民家である。外は殘り少い秋の陽が土塀に反射してゐる。豆腐!! 湯豆腐! 松茸を浮かして悪くない。路郎先生の「なあちろり」の句が身に泌む。そんな夢でも見直そう。

註、(豆腐は同文、同音である)

◇

ワンパイーヤン(亀同様)は馬鹿以上の罵倒である事は支那記行文で御承知の筈。烏は支那では鳥の中で一番多い、鴉群天を覆ひて移動する黄昏の大陸にひし〳〵と覺ゆる鄕愁に似た淋しさは知るものぞ知るである。烏の「カア〳〵」は日本では古から徹底的に忌み嫌はれてゐるが同文同種と云はれる支那ではその啼聲は「ハオ〳〵」であるから「好好(ハオハオ)」であると云はれ危害も與へず奉つてゐる。日本の烏移住すべしだ。

◇

駄馬北風號が分娩する。當番の××一等兵は蒼くなつて陣痛を催してゐる馬の側で何くれとなく世話をしてゐる。「チャン馬だつたら大變だ」混血馬?と云ふ心配の種? に××一等兵は身を切る思ひでゐる。稍々あつて神秘のセロハンは破れた。ニュッと前肢が出た。キョトンとした長い仔馬の顏が現はれた。「オイ耳は短いぞ」「チャン馬じやないぞ」と呼ぶ參觀人の中で××一等兵はホッと大息をついた。心配の種は朗かな實を結んだ。ここにも「產めよ育てよ」と。

◇

入浴は我らの情報部である。一日の情報はみな此處へ集まる。駐留となると甕風呂から木槽になる。兵隊の誰もが洗濯と入浴を好いてゐる。今日の健在の證據を見せ合つてここで生を嬉び合ひ、童心に返つて情報を交歡する。情報の內容は○○の秘密に關する事が尠くないから省略する。とにかく樂しい入浴である。綾太郎、米若、泉詩朗はここに居る。

朝鮮雜記

弘津柳慶

朝鮮では同姓者同志は、絕對結婚出來ない事になつてゐる。例へば金姓は朴姓か白姓か李姓でなければ、結婚出來ない。そして結婚後入籍も、そのまゝ朴姓から嫁ついたら、朴姓のまゝ入籍せられる、夫が悪い事をしても、妻は平氣で居られると言ふ、東洋道德としては一寸首肯出來ない所がある。內地人が鮮人宅へ嫁げば、當然內地名で入籍される。だから、門標に金某、の横に何々何子と、まるで他人のように名札が並んでゐる。今度戸籍法改正に依り、來年一月一日より、その悪風も消され、純然たる夫妻同姓となる、又鮮人名も、內地人名使用を許可され、此姓名を使用する事になつた、同姓者が結ばれなかつたのは、同姓者は血族であり、血統の同じ者が結ばれるのは獸畜に等しいと言ふ、一應首定出來得る所から出てゐるのである。

貝釦

岡田某人

なめくぢ——やあやあ、返せ戻せ、卑怯であらう。

かたつむり——これがおいらの金城湯池。卑怯でなんぞあるものか。羨しけれや口惜しがれやい、この裸んぼうめ。

※

ゴブラン織の壁掛けの向ふがはがきつと壁だと思つてゐたらひどい目に合ふ。

※

甲(たん)ではじけば甲で鳴る。乙ではじけば乙でなる。DO・LE・MI・FA・SO・RA・SI

おのぞみ通りになつてみせようがしかしですヴアイオリンの絃をつかまへて三味線みたいに鳴れなんて、そりやあ無理といふものです。

※

小便から立ちのぼる湯氣。ある人は湯たんぽの湯を捨てる、と云つたが、なるほど。僕は生命の一部を放棄してゐるやうな氣がして實に惜しい。

戸外は氷雨。

※

シャボン玉のやうに考へてゐる。キラキラとして美しいものや、色彩の渦が絕間なしに動いてゐる。だが中味は空だ。——あるところまでふくれると割れてしまふ。そして又はじめからやりなほしだ。

※

鷹か天狗にでもなつてやるつもりで酒をのむのだが、忽ち羽根をむしり取られて、地に墜ちた病氣のふくろふになつてしまふ。そして翌日或は翌々日にはどやされた後の犬みたいにポカンとなつてゐるのだが、幸か不幸か、雲に入り天を翔けらう野心は日を經るにつれてまた頭をもたげて來るのだ。全く、幸か不幸か。

懸賞 誌友倍加運動

本誌は聖戰下の趣味陣營にあつて素晴らしい發展を續けつゝあります。

東洋永遠の平和を確保する長期建設に際し外地は云ふに及ばず內地に於ても如何に笑ひを要求し如何に超脫朗笑的な趣味に渴仰しつゝあるか想像に難くないのであります。

本誌は茲に見るところあり、これ等の渴を長足に醫するため左記規定により誌友の懸賞倍加運動を開始しました。振つて御參加御援助下さるやう願上げます。

新誌友應募規定

☆誌友たるの資格は「川柳雜誌」一ヶ年分三圓六十錢を前金にてお拂ひ込みの方に限ります。

☆誌友を一名御紹介下すつた方には抽籤券を一枚、二人御紹介下すつた方には二枚、以上これに順じて抽籤券を差上げます。

☆誌友希望の方は自己推薦として一ヶ年分前金にてお申込み下さい。

☆誌代のお拂込みは小爲替又は振替口座大阪七五〇五〇番を御利用下さい。そして小爲替の方は紹介者名及び誌友名を御明記のこと、振替の方は通信文欄に紹介者名及び誌友名を御明記下さい。

☆誌友の御紹介は幾人でも結構でございます その御紹介の人數丈け抽籤券を差上げます

☆抽籤は建國二千六百年の二月十一日本社に於て嚴正に執行いたします。

(發表は昭和十五年三月號)

賞品

一等 桐箱入川柳掛軸(麻生路郎揮毫幅) 一名

二等 川柳横額(同) 一枚宛 二名

三等 川柳短册(同) 一葉宛 三十名

四等 投句用箋 一册宛 殘り全部

大阪市西區江戸堀上通二丁目六 昭和ビル

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇

髮の美は
げに日本の
姿なり

フケ・カユミを止め白髮・若禿を防ぎ明朗な壽年美を創る

伊豆椿ポマード

椿油香豆ヲ舗本

大槻彩芳園

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する(編)

催

▼川柳雜誌社は十一月二日午後四時半から柳誌の誓文拂を行ひ引續き六時半から例會を誓得寺で開催。▼五日午後一時松坂倶樂部藏生路郎川柳講座。▼六日二十八日阪田オフイス川柳會。▼九日、二十四日夜有恒川柳會▼十日午後四時阪大川柳會は奈良縣協同病院耳鼻科醫長に就任せられた、會員內海貞三氏の送別句會を併せ開催された。▼十三日川柳月評會丹路居に開催。▼十五日梅田支部句會カナメ食堂に開催。▼十九日松坂倶樂部笠森稻荷吟行。▼二十一日夜尼崎住友金屬綱管製造所親友會句會。▼二十五日ちぬの海川柳會創設發起人句會を米本邸に開催以上何れも路郎主幹出席。▼このみ川柳會十一月句會は五日夜、玉造淸水神具店に於て開催。▼大阪鐵道病院句會は十一月十七日同所に於て開催。▼前田五健君の松山媛柳吟社では第十二回而笑子忌を十一月二日、同君宅に開催された。▼川雜下關支部では十一月一日國弘半休君昇進祝賀會を開かれた。▼大連の滿洲番傘川柳會では川柳大陸社及び春聯川柳會後援のもとに出口夢詩朗君靑島進出歡送句會を十一月十七日滿鐵社員倶樂部に於て開催された。

消息

▼佐々三木福君(大連)は南紀方面回遊の途次岡らずも御令弟の急病に遭遇され、路郎主幹と病狀を見屆けられ九州を經て一應歸連された。▼大谷五花村君(白河)は十一月中支方面を視察された。▼戸倉普天君(兵庫)は夫人同伴別府から鹿兒島、熊本、阿蘇、雲仙へ廻遊され、「土堀れば諸がころがるお湯が噴く」の旅便りを寄せられた。▼阿部佐保麗君(東京)は月刊淺草レヴュー川柳欄の選者を擔任されること丶なつた。▼福田山雨樓君(東京)は二十四日公用で西下された。▼森東魚君(新居濱)は十六日來社、主幹と歡談。

事務家は待望す
2600年
卓上日記
OS
全國便箋本舗
岡本ノート社
電話 東京下谷608 大阪東518

▼橋本綠雨君(大阪)は十一月十一日寒霞溪に遊ばれた。▼長崎柳秀博士から「實驗治療」の拔刷「不思議な我が書齋」を贈られた。▼有恒川柳會の橋本波夢造君はかねてから病を淡輪に養つて居られたが最近快方に向かはれ、近く歸宅される由。▼十一月三日紫香、風葉、潮花の三君は箕面へハイキングされた。▼住田亂耽君(兵庫縣)は十月十五日病氣全快された由の通知に接したお歡び申上げる。▼平尾歌調、村上淸の兩君(今治)は十七日上阪、伊勢、京都を見物された。▼中西おさむ君(大阪)は十一月十八日南紀白濱に遊ばれた。

慶弔

▼芝田靈子君(松山)は十月二十八日女子を儲けられ敦代と命名された。▼伊藤楳子君(松山)は十月三十一日華燭の典をあげられた。▼三笑小原方次郎君(大阪)は十四日午後七時五十分逝去された謹悼。

轉居

▼大森千代香君は廣島市仁保町靑崎二〇〇波多野かず方へ。▼松本雪舟君は大阪市此花區櫻島北ノ町一四櫻島アパート南ノ三十一へ。▼吉田湊万君は奈良縣磯城郡櫻井町へ。▼藤川鈴峯君は大阪市港區八幡屋錦町一八四池田方へ。

★社告

▼左記四君が新に不朽洞會に入會された。

兵庫縣 川出美根子君
大阪府 中島生々庵君
大阪 上田耕二君
兵庫縣 戸倉普天君

川雜・案內

六號活字十四字詰三行金五錢、一行增すごとに金十錢(但し前金切手代用可)改號、移轉、句會案內柳書廣告、その他

川柳しなの
一部拾五錢 一年一圓八十錢
松本市大名町
しなの川柳社

京
一部十錢 一年一圓(稅共)
京都市御幸町松原上ル
發行所 京都川柳社

川柳草薙
東海の代表誌
一部一〇錢 一年一圓(郵稅共)
名古屋市南區八熊町寺田
發行所 草薙川柳社

川柳きやり
菊版每號六十數頁
每月一日發行 一部廿五錢
東京豐島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

川柳伊豫
一部拾錢 一年一圓廿錢
松山市南柳井町五九
愛媛川柳社

月刊 川柳みちのく
一部十五錢 一年一圓五十錢
靑森縣黑石町 川柳みちのく社

川柳大陸
一部二十六錢 一ケ年三圓
大連市仲町九
川柳大陸社

春聯
一部二十錢 一年二圓(稅共)
大連市薩摩町一六一森崎方
春聯川柳社

柳友
一部拾五錢 一年一圓八十錢
東京市杉並區和泉町八四
柳友會發行所

時局下に相應しき最も眞摯なる百貨配給機關としてその指命の達成に邁進致して居ります
大丸
月曜休業
大阪心齋橋

淑髮ウエーヴは
大阪・心齋橋筋周防町角
ナショナルへ
山口倫子
經營
電南992

川柳塔

＝路郎選＝

ポストまでよその子を抱き泣かして來　大阪　橋本綠雨

すき燒に落つきが出來た雨ごなり
二人で來て別々に探す古本屋

寒霞溪

寒霞溪馬で登るも景になり

龍田から法隆寺へ遊ぶ

秋晴れへ乘合なんていらぬもの
心齋橋儲けただけを呑むつもり
自轉車ごに共に倒れる酒を呑み
草臥れて酒だ酒だよ女もよ
運針に一人ほほゑむ十八九　大阪　高橋かほる

男湯に靴を見受けた冬の風呂
松茸が匂ふ三等待合所
小兒科の車夫は走つた汗を拭き　大阪　奥村丹路

秋の燈に男を憎む妓もあらむ
わが叱る聲におごろく秋の末
夫唱婦隨ごんかつにくる日曜日
ほんごうの事を申して座が白け
階段の屈曲に慣れ宮仕へ

鉛筆の便りいよ〳〵落目なり
菊の花書齋の主はごこへいた
ふごころに本を一冊秋を行く
板前ご文學論を一くさり　張家口　岩崎柳路

お妾も國婦の襷長期戰
コミッションの一部もあるか預金帳
無理をして逢ひに來たごは知らぬらし

再緣の友に招かれて

煙草喫ふ嫁も嬉しや殖民地
再緣の嫁の荷に見た、男物　ハワイ　高澤一浪

年甲斐ご男甲斐ごがタクトふる
情い戀女將出すぎた口を利き
人妻であるなし今からでは遲い
燒場ですら否應なしに御出あれ
娘ご同じ年齢の戀人娘にかくす
大晦日サルマタだけは替へませう
急がない時は二世も日本語
百弗に許す唇なごもちません
お祖父さんの膝にずごんご三輪車
國境も民族もない趣味の友
十二月女房如きに愚痴らるゝ
光陰は無情ちりめん皺がよる
肩かりた宵から人目さけまする　大阪　戸田孤筮

子供汽車今日も子なしが見に來てる
管制の月を見直す街に住み
働いて猫も喰べさゝねばならず
八百安の車を圍む令夫人
傷痍章コーヒ氣兼ねな味になり

○

嬉しい數字は手の平へ書く　大阪　正本水客

食慾ご云ふ語が嫌なマダム達
切符手に持つて女は旅なれず
淑髪の仰々しさを間近に見
小遣ひをたんまり持つてニュース見る
金絲銀絲まぶしきものに見る義妹
ひろぶたへ飲めない猪口を置くも旅
秋雨のなかへ主人も出て送り
紙屑のヤリ場に困るワンピース
じゆず持つて年寄連の口が過ぎ　豊中　黑川紫香

欠勤の朝を保險屋襲ひに來
屋上で見れば電車も面白し
病院の窓に飛行機一つ飛び
何處かで飲む氣の舗道ぬれてゐる　大阪　丸尾潮花

管制下月の光に濡れて立ち
失職のそれから女寄り附かず
藝術か戀か雨の日のみ續き
スピーカーは迷ひ子の母を呼んでゐる
紅葉浮く溪の流を手ですくひ　大阪　大坂形水

統制下親爺「改造」なごを讀み
意志の弱い男へ寢間が溫うなり
ふるさごは海邊づたひをバスに搖れ
お百姓笑ひもせずに案山子立て
葦平歸還金の評價で話してる　大阪　岡田某人

女立ちごまれば人を待つ姿

炙据ゑる眼をみひらけば床に菊
下戸何ミ霎の夜を寢るだけか
ひきうけたミもなく役が付きはじめ
贈られた柄へ別離の涙おち
うるさきものに下戸のくちばし
ヴエヂタブルサラダ綺麗な話する
待つたのが乘つてゐそうにゆきちがひ
譯あつて別れ二階で足袋を干し
かなしや身を引く智惠を女持ち
おぼろめく奈落に祭る神一つ

尼崎 酒井斗風

佛壇へしまつてあつた日記帳
炭三俵置けないわが家冬せまる
氣短い父にあきれた男の子
好色ミ猫背だん〳〵父に似る
出勤のしばし見ミれたゴルフ場
飛行燈奈良から寒い風がくる
佛心の他人にたよる顏になり
兵隊さん泊り齒科醫は今日休み

兵庫縣 北川春巣

買つて來た人は嫌ひなわさび漬
顎鬚の長さが邪魔な聽診器
放送局へ出てますラヂオ掛けつゞけ
私語がフィミ女教師氣に障り
病後の散歩自動車にごなられる
別れ行く女、男を振り向かず

兵庫縣 水谷鮎美

夕刊の廣告欄に酒の味
姑の錆びない庖丁買うてくる
體位向上へちまの水も忘れてゐ
世間並はずれていのちびろいする
コンパクト女の鼻はたかゝりき
宿直の月みるこゝろ唄になり

小百合さんにおくる

菊の香のなかを國防婦人ゆく

大阪 姫田夕鐘

ハイカーのむねにのぎくのいちにりん
繼の辻占を松屋町へ買ひに行く
娘を連れて飲みに來たのは「雨風家」
結局は劇評ミなる君ミ僕

名古屋 吉田水車

美顏術出れば北風まミもなり
電髮ミ書き替へさせて役がすみ
百圓札くたびれたのはなかりけり

南支 宮岡白峯

野に山にてね兒の噂娘の噂を
砲聲の中で詩人の立ち話
表門良民證を讀みきれづ
慰問品ごれも褌便箋紙

一路集

募集句

番傘 かほる選

番傘の包も旅と云ふ重さ　水客
番傘へ名所の雨はしたしまれ　白林
廣告の樣に番傘さして行き　文庫
番傘の番號だけの數がなし　風葉
番傘は心齋橋の裏を行き　春巣
番傘をさして女給は風呂へ行き　破衣
番傘をさして女工の見榮もなし　靜波
番傘を斜器用な尻からげ　市多樓
番傘が通りを續く俄雨　久枝
おしつける樣に番傘貸して呉れ　同
番傘の文字の大きさ柄の太さ　靜觀堂
番傘も土産に買つたツウリスト　北海
うどん屋の番傘太い字で書かれ　紫香
番傘が二つ止つた顏なじみ　青風
貰ひ物そへて番傘返しとき　惡源太
番傘に船場の雪が少し降り　葉光
(佳)雨のラッシュに目立つ番傘　みづほ
(同)番傘の中から洩れる浪花節　同
(同)番傘が釣してあつて手内職　柳美
(同)新しい番傘小僧嬉しさう　九坡
(同)乗り替があり番傘を借つて行き　曉童
(同)番傘は窓から聲をかけられる　鮎美
(同)肉鍋は嫌ひ番傘借りて去に　同
(軸)番傘は西長堀で横になり

別莊 鋭々選

別莊地道を聞くのに手間が取れ　東狂子
賣別莊冬の陽ざしへビラが搖れ　柳太
此の子供別莊育ち蒼白し　九坡
何か譯のありそうな別莊　靜觀堂
別莊の塀を通れば犬が吠え　靈子
抵當に入つた別莊で病んでゐる　葉光
別莊のもう賑やかな夏になり　松太樓
別莊で會へば大臣あいそよし　紫香
別莊へ蛇が一匹出た騷ぎ　巽天樓
松林別莊へだけ道をつけ　富士
配達を困らす氣ではない別莊　文庫
表札もなく別莊が古びたり　水虹
別莊が見えるとこまでバスが來る　同
別莊の子は遠くから眺めてゐ　惡源太
強そうな犬別莊に二匹もゐ　同
別莊の方で奥樣悟りきり　水客
海鳴りへ別莊番は寒くねる　同
別莊を持たぬ大臣親しまれ　風葉
別莊の裏掃く人も人生だ　同
繪のやうに別莊へ秋黄昏れる　曉童
別莊へ着くなり女喰べるなり　同
別莊の横に理化學研究所　鮎美
(佳)別莊の枝にきれいな渡り鳥　同
(同)別莊の時計止まつたまゝ光り　曉童
(同)別莊の庭にシェパードの墓　紅多呂
(同)別莊に咲いて秋草繪にされる　久枝
(同)茶の花の盛り別莊賣る話　水客
(人)別莊で見る雲の色きれいです　風葉
(地)別莊のハシゴをかけたまゝの秋　鮎美
(天)別莊に生まれ鼠の口が肥え　春巣
(軸)別莊の客は雨までほめておき　鋭々

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規清

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
投稿先は本社宛

路郎・豆秋整理

本社十一月例會

二日午後六時　於　誓得寺

例會前に開催された柳誌の誓文拂ひが人氣を呼んで、「大理石」の選者奥村丹路氏が賞品にと大理石を持參されるかと思へば明日の明治節へ夜行を利用してハイキングに發つ姫田夕鐘氏が大形リュックサックを背負ひ込んでくる。いつもの例會とはまるきり違つた雰圍氣を生む。回を重ねて益々洗練の度を加へる鮎美氏の講評は興至るや得意の演劇方面に及び矢口の頓兵衛が出て來たり五段目與市兵衛が登場するあたり一同熱狂、某人氏の「貝釦」式の柳話は壇下笑へば壇上又笑ふ朗笑裡に終始し、各題披講の後、路郎主幹が誓文拂へ出品した柳誌二三のエピソードを語られるや、忽ち、それ等の柳誌の買ひ手が殺到したがすでに石井白面人氏への賣約濟みと知り悲喜劇を展開して閉會、掘り出しの珍本を小脇に參會者の足どりも輕い。因みに今後柳誌の誓文拂ひは本社の年中行事の一つと決定された(曉)

出席者(順不同)

路郎・翠葉・光路・一龜・夜王・豆秋・水虹・丹路・夕鐘・紫香・かほる・孤蓬・いわを・青兒・夢裡・默平・綠雨・紅多呂・潮花・鮎美・謙南坊・斗風・某人・銃人・栞・いづむ・春巣・八歩・白面人・湖秋・南風・一笑・杢介・葭乃・アート・曉童

席題「やいと」　互選

男の子もうやいとの手は喰はず　銃人
やいとだけ忘れぬやうと書添へる　一龜
寺の灸み佛様へ肌を見せ　春巣
やいとした煙たゝへた部屋を開け　夢裡
としよりとやいと秋の立話　丹路
やいとへ無事な父の晩酌　八歩
縫い立ての袷やいとでしわになり　かほる
葬式で逢ふてやいとをすゝめられ　豆秋
お風呂やで灸の數を數へられ　水虹
やいとまだ消えず爆音聞えて來　春巣
郷里の老母やいとが利いた便り　斗風
こよみ見てやいとする日きめてゐる　紅多呂
母親のやいとへチント子が坐り　潮花
やいとすゑ妾四十を淋しがり　斗風

席題「パイプ」　青兒選

休憩のパイプせわしく吸ひ續け　翠葉
言ひよどむことへパイプはいぢくられ　一龜
悠然とパイプ虚勢を張つて出る　曉童
チェンバレン、パイプを置いてついに起ち　夜王
灰吹きとパイプよく似た色になり　かほる
妓のひとりパイプの火をば消したがり　鮎美
兩切へパイプは別な味をみせ　いわを
象牙かと云ふてパイプの艶を撫で　夕鐘
賴母子の話へ竹のパイプ出す　某人
(佳)實印とパイプ思案の前へ置き　かほる
空想と野心にくゆる夜のパイプ　八歩

席題「紅葉」　八歩選

紅葉狩りキャンプの煙なつかしみ　一龜
地下鐵に紅葉が落ちてゐるも秋　白面人
紅葉を松茸山の道で賞め　同
紅葉茶屋書入れ時の聲を出し　夜王
紅葉をよそに建國奉仕隊　いわを
二年目の紅葉を軍事便へ入れ　豆秋
紅葉狩り一人蓑虫見付けて居　春巣
紅葉にはまだ早き日を左遷され　丹路
ハイキング紅葉が邪魔になつたバス　斗風
紅葉狩名譽の家の前を拔け　夜王
(佳)紅葉狩りモンペの人に追越され　春巣

席題「齒磨」　夕鐘選

齒磨は鷄小屋へまつすぐ來　曉童
齒磨粉ゆんべの思案又つゞけ　紫香
齒磨がちつて氣兼の女形　鮎美
笑はした齒磨粉が顏へくる　湖秋
齒磨粉プランを變へる雨が降り　銃人
齒磨を殘し天保山へ着き　かほる
齒磨の口で七、八軒目を教へ　默平
齒磨粉山いつぱいに霧が込み　潮花
齒を磨くこゝろも旅の洗面所　丹路
もう酒は止めたと思ふ齒磨粉　某人
(秀)齒磨も山の靈氣に濕るなり　鮎美

席題「八卦」　綠雨選

八卦見る男も火事を見てゐたり　水虹
迷つてる心八卦に見つけられ　同
八卦など信じて母の氣の弱り　丹路
も一度試みて見る八卦なり　いわを
いたづらの八卦案外よくあたり　杢介
八卦見は先づ手相から先に說き　翠葉
女難の相などと八卦如才なし　栞
子が出來る八卦へ妻はうれしがり　斗風
八卦見てまぎらしてゐる藥瓶　豆秋
八卦見る人の姿も冬の街　丹路
大丸の前で八卦が店を出し　一笑
八卦見に行つたと言はずことゐる氣　いづむ
男には內證で八卦見て貰ひ　潮花
(佳)幸運のついで八卦も見て貰ひ　鮎美

兼題「大理石」　丹路選

大理石にも似てもの言はぬ妻　曉童
秋の陽に冷たくひかる大理石　斗風
增築の灯に冷めたきは大理石　鮎美
靴音のつめたくひゞく大理石　南風
待つ人の吐息に曇る大理石　葉光
大理石の時計は今日も止まつてる　白面人
颯爽と來たのを映す大理石　葉光
一錢の音で大理石へ落ちる　春巣
茶を捨てるのは困つてる大理石　紅多呂
薄情な色に出來てる大理石　謙南坊
諦めた顏が映つた大理石　青兒
大理石白痴の夢に似て光る　曉童
門衛に寒さが迫る大理石　謙南坊
金策の云ひそびれてる大理石　八歩
(軸)憂き朝の足を滑らす大理石　丹路

兼題「ぬけ毛」　路郎選

ちり取りの隅にぬけ毛がまだ殘り　かほる
すきぐしへつめたいぬけ毛ふと感じ　綠雨
妾宅の猫のぬけ毛をつけてくる　豆秋
ぬけ毛ふと人生觀の端に觸れ　夢裡
かみゆいは拔け毛丸めて見せに來る　一笑
獻金へ拔け毛の分も混ぜて置き　青兒
名人のぬけ毛をすてる月あかり　鮎美
ぬけ毛など言ふて撚でももどす氣か　曉童
秋ですものと拔け毛の事にふれさせず　同
白い拔け毛に餘生數へる　銃人
美容院ぬけ毛は勝手から賣られ　同
帳尻があはず拔け毛をつまんで居　紫香
拔ける毛が增えてネクタイ派手になり　白面人
ぬけ毛ぬけ毛はとりまみれの日を送る　アート
拔け毛ふと淋しく憶ふ旅に立ち　紫香
冬帽を出せばぬけ毛が付いてゐる　紅多呂
日曜は緣の拔け毛をきたながり　いづむ
梳子いま二三本拔けたなと思ひ　光路

お互にぬけ毛氣になる女給部屋　一龜
拔毛ぬけ毛先の知れてる暮しする　某人
(人)鳥籠の下のぬけ毛の氣がまぎれ　鮎美
(地)ぬけ毛一本帽子の裏で年を越し　春巣
(天)某月某日博士ぬけ毛を笑ふなり　鮎美
(軸)ぬけ毛するころ文學を忘れて居　路郎
妻君のぬけ毛は特にきたながり　同

雜川　**廣島支部句會**（廣島）
濱田久米雄報

秋の夜、小說、玄關、祈る、手

灯に座して詩集をめくる秋の夜　一甲
秋の夜もいつしか更けた髀の音　良句天
秋の夜隣の鍋はすき燒か　比呂夫
秋の夜誰かに手紙書きたい氣　伯峯
秋の夜をぜんざいにするあみだ籤　秋史
燈消えし秋の刑務所　不水
秋の夜ひし〳〵壁の冷えを知り　千代香
しつぽりと秋をふくんだ夜の疊　紫浪
秋の夜の下駄がふところ手にさせる　同
秋の夜佳人に悔の多かりし　不水
秋の夜按摩の笛が冴えてゐる　白外郎
秋の夜の話いつしか更けてゐる　久米雄
小說の手垢氣にせず借りて讀み　千代香
小說に似たは慘めなとこばかり　麥作
先輩も小說めいた過去を持ち　三郎
小說へ同情をして女ひま　久米雄
名作の興奮中々寢付かれず　伯峯
小說が敎へてくれた生きる道　天國
小說の緣は最後で纏められ　秋史
一株の菊が玄關匂はせる　清登詩
玄關で濟ます積りが醉つて居る　須彌浩
玄關の暗さも俺に合ふ暮し　麥作
玄關へどうでもなれの靴を脫ぎ　久米雄
玄關へ留守だ留守だと子が出て來　康津奈
神前へ凡夫の慾を祈り上げ　須彌浩
母と娘と思ひ〳〵の手を合はせ　久米雄
子の武運祈る老母の肩細く　小步危
もう萬歲とどかぬ母は祈つて居　紫浪
祈る影朝もやの中に浮き上り　伯峯
腹の子へ別な祈りを妻は持ち　清登詩
拍手の消えてく森が明けかかり　久米雄

日昨日　小步危
賭馬へ祈りつゞける秋日和　須彌浩
手を見てもらつて明い街に出る　久米雄
手をしやぶる事を覺えた子の機嫌　白外郎
座敷牢手を打つてゐる夜の冷え　忠人
萬歲の手大空に意氣强し　紫浪
召集と別に手相も見て貰ひ　秋史

みさごグループ川柳會（廣島）

十月十八日　於　鈴木一雄居
濱田久米雄報

鈴木一雄君の結婚を祝して

新婚、鯛、第一步

新婚へ相手の悪い友が來る　一雄
新婚へ近所の子供よくなつき　白外郎
新婚へ用聞そつと顏を出し　忠人
新婚そろ〳〵赤ン坊のことにふれ　紫浪
新婚の匂ひが浸んだ此の葉書　彌山
新婚へ障子明るく映えてゐる　至宏
新婚の今日はハイキングのプラン　久米雄
呼び捨てにして新婚は打ち解ける　同
新婚へ長居氣にした腕時計　同
新婚の日記頁が足らぬなり　同
新世帶魚屋鯛を賣つて居り　彌山
大鯛へ俺も手傳ふ台所　白外郎
お目出度は鯛の肴で歌はされ　久米雄
吸物の鯛の目玉の太いこと　白外郎
大鯛へ主客は膝を正したり　久米雄
僕達を祝つた鯛の生きもよし　白外郎
祝膳へ鯛傲然と幅をとり　久米雄
入城の先頭を行く聯隊旗　白外郎
門松を立てゝ門出の第一步　一雄
第一步から仕直すと髮を刈り　紫浪
凱旋へ親友を見つけた第一步　白外郎
破產の夜第一步への荷をまとひ　紫浪
標札の木の香が匂ふ第一步　白外郎
ラッパいま聖戰へ行く第一步　久米雄

雜川　**下關支部句會**（下關）
九月二十四日　於　暢爺居
多田市多樓報

力、應召、白粉、米櫃、形、

大陸、愛情、別れ、霜柱

勝將棋力を入れて駒を打ち　山彥
力瘤應召を待つ腕が鳴る　藤市

腕相撲顏に力を入れており　柳月
五人目が遂に敗れた力瘤　九呂平
勝敗は只一聯の底力　暢爺
日の丸へ力の入つた字がにじみ　芥兆
令狀へ先づ隣から人が來る　同
赤タスキ取り卷いてゐる旗の波　白陽子
千城となつて戰の庭に立ち　同
應召へ母取亂す風もなし　双龍
戰線も銃後も同じ氣で送り　米三
待つ甲斐のあつて征途へ上る秋　暢爺
大和魂秘めて元氣な赤襷　米三
應召へ門出の朝の茶碗酒　市多樓
非常時で白粉代も貯金箱　きくの
白粉の香りも高く嫁き遲れ　市多樓
金儲けする白粉を塗つて來る　同
白粉のなかで育つて裏をしる　草路
米櫃へ明日の米だけ買つて來る　代志久
米櫃の其日暮しのブリキ罐　文福
米櫃は命の綱の金庫なり　はつみ
米櫃を病める夫にまた聞かれ　九呂平
米櫃の漸やく三十日越せる音　不川
米櫃を賴む旦那は未決囚　暢爺
足形は簞笥をあけて塀を越し　同
形よい家に浮世の風あたり　哲志
人間の形を破つて今日も生き　白陽子
松がよく茂り平和な山形　不川
胡弓の音大陸靜かに暮れて行く　梅王
大陸へ故鄕の愛がとゞけられ　草路
大陸は俺の墓場に相應い　九呂平
大陸の土へ祖先の血を感じ　不川
大陸で故鄕の夢は小さ過ぎ　流星
愛情に强く親犬ほへつける　苦笑
子を叱る母の心に一しづく　梅王
愛情も今日を限りに赤襷　不川
乳母車押す愛情へ溝があり　市多樓
繼母に渡せない娘と丸う寢る　不川
長屋中仕事着のまゝ泣いて呉れ　同
握り上げた拳へこもる父の愛　米三
挨拶の別れにドラの音が强い　九呂平
淋しさを無理に笑つてさようなら　不川
未練だと母は別れを强氣なり　九呂平
お別のテープ背中の子に持たせ　市多樓

霜柱犬がトップを切つて居る　比呂志
霜柱ふんで平和な麥畑　文福
霜柱けつて大氣へ深呼吸　のぼる
霜柱步哨嚴然たる姿　同
霜柱塹濠ぶじな朝となる　不川
霜柱踏んで希望の朝を出る　市多樓
霜柱踏んで興亞の陽が昇る　勇記

雜川　**蒙疆支部句會**（張家口）
十月十五日夕　於　柳路居
岩崎柳路報

電氣

物思ひ高壓線に雲があり　柳路
外燈が霧にぬれてる醉心地　四絃
レントゲン其處に博士が一人でき　みのる

注射（十月二十二日夕）

注射針看護婦さんの冷たい手　柳路
注射して風なき晝の水枕　柳翠
瘦馬に鞭打つ最後のカンフルだ　四絃
注射打つ樣な病氣にだれがした　幽鳳
もう駄目と思ひながらも注射する　みのる
ぬかに釘さす軍醫の荒い注射なり　桃水

鼠、雪、勘違ひ（十一月十二日）

此の街も雪が降つてる夜行汽車　柳路
雪解に蔣介石が崩れてゐ　同

ゆきだるまもう出來上る子等の聲　松代
戰線へゆきがふつてる事も書き　同　柳翠
占領の今朝は雪なと降つてくれ　幽鳳　柳路
初雪を血汐で染めた忠魂碑　同
勘違ひ致しましたと仲居てれ　松代
勘違ひの母丁寧なお辭儀なり　柳翠
去つた後矢つ張りおれが惡かつた
養子ふと眞顏になつた勘違ひ　同　幽鳳
入智慧をはら〳〵させる勘違ひ　同　桃水
釣錢が合はぬ帳場の勘違ひ　同　柳路
勘違ひして濟まなんだとも言はず　同　清水生
逝く人の心も不知ず雪が降り　同　默人
勘違ひほれたは妹の方であり　同　桃水
廣東で鼠を喰べた話も出
あきらめたやうに鼠のさむい顏
貧棒は鼠の顏もなぢみなり
ねずみの巢がこんなとこにあつた大掃除
生捕つて飼へば可愛い鼠の子

大鐵局支部句會（大阪）

正本水客報

雜川

世話好き、青空、茶の間、屋上、バスガール、ネクタイ、結納、幽靈、小遣、鉛筆、賞品

世話好きは何處かへ傘を忘れて來　春巢
エプロンのまゝで世話好き話し込む　紫香
世話好きは始末書までも頼まれる　水虹
よれ〳〵の袴で世話好きやつて來る　久枝
世話好きの夫へ妻は不服なり　幸路
青空へ菊の手入れの背伸をし　某人
風鈴のむかう青空暮れんとす　同
青空をハッキリと見た病み上り　春巢
洪水の跡青空に覗かれる　水虹
趣味らしい瓢簞があるい〳〵茶の間　万的
吳服屋の茶の間へ通る午下り　嘘川
茶の間だけ灯がついてゐる雨催ひ　春巢
じれきつてるらしい茶の間に湯がたぎり　柳太
屋上へ引張り出して金のこと　同
トーストの腹で屋上まで上り　曉童
大都會の屋上へ出て深呼吸　秀太
バスガール表情もなく禮を云ひ　久枝
バスガール働けぬ父持つてゐる　曉童
バスガール云ひ損ひにふと默り　春巢
咽喉卷いて春を綺麗なバスガール　某人
ネクタイの色褪せてゐる老教師　秋志
ネクタイをとき〳〵遲い譯を云ひ　紫香
ネクタイを更へて出る日を妻とがめ　柳太
ネクタイの風まだ若いまだ若い　某人
ネクタイの端をなびしたキャンピング　水虹
ネクタイもキリ、背の君出で給ふ　曉童
凝る程にネクタイ人が見て呉れず　嘘川
ネクタイの柄へも女將少し妬き　春巢
結納へせわしい母となりにけり　秀太
結納の額が揉めたは知らず嫁き　銃人
結納などと心よからずまかせきり　亞鈍
結納を交した日から寒くなり　水虹
結納などと親の氣持の外にゐる　亞鈍
結納へ奥の座敷に塵もなし　某人
幽靈は蚊帳の外まで來て坐り　水客
幽靈へ舊家は丁度いゝ暗さ　某人
幽靈が出そう舞台は嵐の夜　万的
小遣に足りない金で使はれる　某人
懷のさみしい二人ランチにし　水客
鉛筆の尖り工合を頬に當て　久枝
鉛筆を削りながらも愚痴が出る　水虹
賞品へ並ぶ子供は胸を張り　万的
草角力負けたもタオルもらつて來　幸路
父兄席へ賞品の兒が走り込み　久枝
一等賞あとから小僧取りに來る　水客
賞品のかげで世話役そばを食ひ　同
賞品の山へ小さく社長立ち　水虹
賞品と子と母親と來る佛間　某人

懸賞川柳

課題「耳」十二月十日
「紀元節」一月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先　堺市出島町三五一番地
不朽洞
★化粧新聞社柳壇へ

有恒川柳會（大阪）

寺井鋭々報

十月二十六日

辭職、按摩、俳がけ

職を辭しついで世を辭す老社員　波夢造
さりとては辭職の理由も貼り出せ　同
蹶然と立つたは辭表出すつもり　鋭々
辭職して明鏡止水語る也　同
辭表書くには餘りに秋のよい日和　同
辭職して隣の人に親しまれ　同
辭職した日の訪問をなつかしみ　同
辭意固しその偏屈が惜まるゝ　同
辭表出しマーマーとも云はれずなつちまい　羅漢
同情はあるが辭職は辭職なり　至藝瑠
手に辭表しかし子の顏妻の顏　同
己むを得ずエヘ、と笑ふ按摩也　波夢造
眼の開いた按摩女中に怖がられ　同
翌晩は按摩に聞いたとこで飲み　鋭々
賴み事に行けばあるじへ按摩來る　同
中學の息子を按摩自慢にし　同
もう按摩する心得で嫁は立ち　同
職業を問へばマッサージと答へ　羅漢
按摩から浮世哲學きかされる　同
按摩から隣家の素性やつと知り　羅漢
温泉の按摩大臣懇意なり　至藝瑠
名物は美人按摩も入れてある　同
按摩さんお前は笑ふ顏でない　同
俳がけにすれば子供はもう居らず　鋭々
俳がけへカメラ向ければ逃げて行き　同
俳がけおけさを踊るとしか見えず　至藝瑠
俳がけ急がしそうに雜誌讀み　同
俳がけの子供は人形叱つてる　同
俳がけを見て眼のうるむ里の母　羅漢
紙切りがさて大層な俳がけ　路郎
女手のみな俳がけ芽出度き日　同

病中吟

秋晴れや醫者も旅行を好くと言ふ　波夢造
見舞客漢藥一つ言ふて去に　同

燈火管制下の道ブラ（大阪）

姫田夕鐘報

十月廿五日

道ブラの顏がわからぬまゝ話し　鮎美
管制の道の藝者はにほはせる　同
サイレンへ闇になりたる二人連れ　同
醉ふてゐる聲ハッキリと後ろから　同
道ブラの餘程話すことがあり　同
道ブラを寄り添ふてゐる暗さなり　夕鐘
出雲屋とはつきりさせる匂ひなり　同
カッピーの香水の娘とすれ違ひ　同
かき舟へ降りるに足がもつれたり　同
果太鼓闇の中へと押し出され　同

よつばし川柳會（大阪）

橋本綠雨報

商人、上役

商人は損だ〳〵と儲けて居　翠芳
商人で見得を張るのも飯の種　一志
商人の口に掛つて買はされる　秀甫
前掛で來て商人の如才なさ　輝翠
商人も統制法に惱まされ　壽堂
商人らしくお世辭を繰り返し　朗舟
商人の紋切り型の世辭を聞き　靜峯
商人は受合ひますと呼び掛る　古憧
商人のやみ取引でひつぱられ　聲香
夜店出しもう是だけと後を出し　芳人
商人が想走らす支那の國　夢想
現金に遂商人の氣が動き　芦穂
洋服で來る商人は口が過ぎ　輝翠
信用が出來て商人嘘つけず　鶴峯
上役の顏色ばかり見て勤め　古憧
上役の挨拶いつものくせを出し　山人
上役が不在と聞いてサノサ節　飛鶴
上役も頭あがらぬ人もあり　吉現
上役が歸つた後の大欠伸　夢想
上役は何時も鋭い顏に見え　糸柳
上役になれば無心も斷れず　松聲
上役になつて名刺も改まる　一林
上役が廻る工場の掃除なり　失名
休憩は上役の噂ばかりして　秀峯
上役の無理は怒鳴つて通すなり　芦穂
上役は話した丈けで行つちまい　朗舟
課長から呼ばれてボタン先づ直し　芳人
上役になつて水晶の判が出來　秀甫
上役の話の桁が違ふなり　芦穂
のんびりとしてる上役冴えを見せ　靜峯

上役の朝の機嫌が氣にかゝり　秀峯
上役は上役らしきことを言ひ　聲香
上役は唯れ憚らぬ腕を組み　輝翠

阪大川柳會（大阪）

十一月十日　於會議室　丸島利生報

奈良、耳鼻、背中　路郎選

二次會で土產の鹿の角がとれ　栞
奈良ホテル女不吉なやうにきゝ　同
子の辨當若草山が待ち切れず　春巢
思ひ出の奈良で新婚雨になり　同
クーポンの奈良は畫めしだけにする　同
今日は奈良明日は京へと母の供　筑川
大佛へ廻るフェルトの疲れやう　柳秀
大佛の肩のほこりを話し合ひ　同
全盛は春日燈籠に名を殘し　同
思ひ出の奈良の旅宿はきたなすぎ　利生
お上りに大佛の高さひかへられ　同
妻の手がフット冷い秋の奈良　春巢
奈良に來て父の無趣味が嫌はれる　同
奈良の街ひねもす鐘を聞く所　柳秀
耳よりの話やつぱり金が要り　同
泣言へ耳垢とつてゐる亭主　方正
實頭盧の耳もついでに撫でておき　春巢
鼻の話娘の機嫌そこなはれ　利生
遠い耳へきかす根氣を嫁はもち　栞
三十年父の脊中に掌を合せ　貞三
戀しさは脊中を搔けとあぐらかき　一彌
大女猛脊になつてかしこまり　山彦
朝歸り妻のいかりを脊に受ける　方正
きぬ〴〵に脊中を叩く術を知り　美根子
よう買はんのかと脊中にらめられ　路生
御免やすと脊中が這入つて來　同
ボクシングの型で女將は脊をたゝき　柳秀
送つたら叱られますと脊をたゝき　同
手のとゞく限り白粉塗り立てる　橙舍
夜會服脊中に灸の痕がある　同
遲刻した脊中の汗がひえてくる　栞
愛人の脊中の擴さ頼もしゝ　同
ゆく春や柱で脊中かいてみる　同
外交は脊中の汗を又云はれ　春巢
頑張つて來いと脊中を叩かれる　同
脊中から聲が出て來る叩き賣　同
駄々こねた子供脊中へとんで來る　同
脊の子にも御禮言はせて歸るなり　芳一
すねてゐた脊中合せが風邪のもと　美根子
舞踊會脊をわらびのやうに曲げ　春巢
徵兵官脊中を押して點頭きぬ　貞三
いなす氣か泊める氣なのか脊を向け　柳秀
甲羅が生へてまつせと恐れられ　路生
先輩と脊中合せでねむられず　路郎
勿體ないと脊中で母は小さくなり　同

松坂倶樂部句會（大阪）

十月十五日　石井白面人報

パトロン、とつとき、借着

パトロンにはなれ四十で名取りなり　普天
パトロンの大きな鼻も見飽いたり　丹路
パトロンの不覺は醉うて寢てしまひ　同
パトロンにでもなり趣味を生かそうか　孤蓬
赤札はパトロン一人つけたきり　同
パトロンに氣兼しい〳〵好きな紋　三華
パトロンは意外うちのパパと知り　同
えらい妓だパトロンの名は出さず居る　同
パトロンの惱み人氣がありすぎる　白面人
新らしい弟子にパトロンが氣付き　同
ホルモンにゴルフパトロン忙がし　同
パトロンを家業の樣な社長死に　同
あそうかもうパトロンが出來たのか　同
この頃になつてパトロンけちになり　同
パトロンと結局金の事で切れ　同
パトロンへひけめ感じる兄を連れ　葭乃
パトロンへ妹の靴も頼んどき　同
パトロンの前で夫が小さすぎ　孤蓬
正直なパトロン今日は歸るなり　丹路
パトロンの長居疲れた眼で座り　葭乃
とつときの一襲出した村長さん　美根子
とつときの文句でほめる婦人記者　葭乃
百貨店またとつときを賣つて居り　くもを
金の事になりとつときの言葉が出　同
とつときの二日つゞきを子に病まれ　孤蓬
とつときの手品が一つ出たばかり　同
とつときの唄を馴染に强ひられる　白面人
とつときの襲は焦らして置いて立ち　同
とつときの時計もつけて應召し　普天
とつときの指輪も賣つて献金し　同
とつときが泣くにも泣けぬ僞せと知れ　生々庵
手をつけてならぬとつときへ親心　同
背に腹をかへてもとつとき守りぬき　同
とつときのとつときで母は京詣り　同
ひやかしに借りたトンビで宿を出る　普天
靖國へ借着の紋が國を立ち　同
借衣裳どうにもならぬ疵が出來　孤蓬
派出すぎる借着話題を避けたがり　同
紋服の借着滿員車におされ　葭乃
肥え方を見込まれて貸す訪問着　同
借着着て結婚式は濟ましたが　美根子
借着とは思へぬ今日の初姿　同
身丈さへ合へば紋など我慢する　同
こうもまあ借りた着物が似合うとは　くもを
應揚さ借着に見へぬ五つ紋　同
足袋だけは買つて穿きなと借してくれ　同
借着々々しみになるなよ酒の泡　同
ネンネコの下へ借着を抱いて來る　同
借着した樣な病後の腰まわり　生々庵
借着らしい紋服も居る遺族席　同
やあ母あちやんとおんなじだ借着へ騷ぎたて　同
借袴ボトンボトンと裾をひき　同
ましなのは貸さぬを借着不平なり　同
羽織借るつもりを金と間違はれ　白面人
シャンデリア借着肱はゆう席に　同
借着したついであすこも行くとする　同
あの柄の方と借着は思へども　同
借着とは知らず甲斐性ほめられる　同
値を聞くと借着知られたかと思ひ　同
借着だわさうだつたわと女の眼　同
借着だつたらしいと妻に教へられ　同
盛會の隅に借着の浮かぬ顔　同
どこで見て來たのかキューピーせがまれる　靜波
まゝごとへキューピーさんも仲間入り　同
キューピーと一緒に寫すまる裸　同
旅愁ふとキューピーさんを買ふと見る　斗風
キューピーと詩集へ秋の陽があたり　同
父の下駄はいてキューピー抱いてゐる　同
キューピーの人氣女優の部屋でゆれ　鮎美
雜巾で拭くキューピーは凹んで　同

川・雜　梅田支部　かほる賞句會（大阪）

キューピー

キューピーに似た子へキューピー買うてやり　由布
キューピーと寢た兒の顔がよく似てる　同
キューピーへ着物を着せた女の子　同
内風呂のキューピー幸福そうに浮き　同
キューピーの影もうれしいもののうち　同
キューピーが朝の掃除にけてゐる　かほる

川・雜　梅田支部　方眠・鮎美對座吟（大阪）

ろくぎんどう報

人生に坂あり苦々苦が多し　方眠
にんげんの華はすつぱしあんの實　鮎美
他人の手も借りず内風呂たゞ樂し　同

非特異性〈全免疫元
オムニン　トッメコ
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症投注）
流感、各種肺炎、肋（腹）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蜂窩織、其他外科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し驚汎に渉り著効を奏す。
（特　長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包　裝）
二cc五管入　二cc十管入
二cc五管入　二cc十〇管入
一cc二管入　一cc五管入
發賣元　株式會社黒田藥品商會
大阪・東京
—文獻贈呈—

大空へ消へゆく人生とも見られ　同

川雑　**はざくら句會**（大阪）

十月二十二日　於　枚方菊人形吟行

丸尾潮花報

菊、人形、柿、女工、見合、雑

目出度き日母白菊と寫される　水客
アパートへ妹菊を活けに來る　紫香
未亡人フランス人形そつと抱き　湖秋
人形も遊び疲れた子と眠る　南風
人形の服も着變へて秋に入る　一房
人形に何か云うてる女の子　一笑
お人形の千代田お召が良く似合ひ　紅多呂
ぶの厚い布團へ人形坐らされ　紫香
半分をあげる心算の柿をむき　紅多呂
戰友は柿泥棒を自白する　一笑
柿の實の青いうちから數へられ　南風
柿かじる子供に寺の路を聞き　紫香
二幕目舞妓はそつと柿を吳れ　潮花
顔だちは女工と見えぬ美しさ　秀溪
男工の嚀の中にゐる女工　志保
銃後銃後娘女工として稼ぎ　鈴峯
朝を出る女工の家に子が五人　狂花
給料日母へ土産も買ふ女工　湊万
落葉する窓が淋しい日の女工　雪舟
面會へ女工綿屑つけて來る　紫香
見合とは云はず娘を連れて出る　一房
葉鶏頭見合の席にたゞ赤し　翠花
吉日を選んだ見合雨となり　志保
見合の日娘好みの柄で出る　秋子
さて見合する氣になれば恥かしい　潮花
見合の歸りに廻るデパート　水客
隣の娘靜かに宵の花を掃き　那羅枝
コスモスの花をくづした風は凪ぎ　靜子
桃割で尋ねて叔母に見あげられ　數子
渡船場へギッシリ並ぶ管制下　筑波
男裝で出る日のネクタイ　潮花
母さんに見せてあげたい菊人形　豆坊
日曜日朝のラヂオに起される　笑門
面白いおもちやで子供泣きやませ　たか子
御堂筋千人針の禮を受け　朝香
ザクロの實子供二つ三つ並べ　千惠子
緣談へ娘そぐはぬ針をもち　ふみ子
定期券娘は歳をのぞかれる　花喜代

戰線への慰問には

柳誌・柳書を

お送り下さい！

兵隊さん寒いでせうと出したのに蚊が出てこまると返事來るなりと違つて、いつ着いてもよろこばれるのは「川柳雜誌」に「新川柳評釋」です。

社關係の人々（いろは順）

主幹
麻生路郎

賛助員
長谷川一雄　池澤樂徹　大道弘平　岡本一方　片岡直純　笠原路生　田崎柳秀　嘉納長二　中濱作太郎　長野晴村　長岡牛之助　藤本卯之助　頭原退蔵

客員
浅田末一　弘藤太郎　前田雀郎　田中五郎　柴谷宰二郎　篠原春雨　蜂須賀好古　藤原里人　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　井晨修　亀井一歩　上田三太郎　川村花菱　田村孝之介　来村あん馬　脇坂素文　生方敏郎　尾崎亮雄　篠田銀波楼　本間迷山　安川久留美　高澤一八　大西寺井鉛柳路　岩崎丹路　奥村十九　永田里樂　西田山雨楼　福田紳　高橋かほる　橋本緑雨　森東魚　小林不浪人　不朽洞會員

戸田孤篷　石井白人　川出美根子　中島生々庵　上田耕二　戸上會善　北谷山鮎悟郎　水田夢鐘　姫松裡　市村没食子　吉田水車　妹尾八九満　須崎元紀女　睿豆秋　松下小柳わを　西宮白雪峰　後藤兒を

石曾根長郎　中西おさむ　原本史客　正風水　黒丸尾川紫香　大岩坂潮花　岡田形虎　岩崎雨　橋坂某人　本波歩造　藤岡至藝　増元三月　田井逸斗　天野由翠居　酒井風布　北川奉集

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄嵩よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
函館支部（函館市）　亀井晨修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
籔川支部（島根縣）　尼緑之助
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　矢野虻之麿
天王寺支部（大阪市）　妹尾八九満
鶴町支部（大阪市）　岩橋双虎
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川皂
大鐵局支部（大阪市）　正本水客
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫

今里支部（大阪市）　市塲没食子
今治支部（今治市）　長野文庫
光笑會（大阪市）　永田里十九
竹原支部（廣島縣）　黒本芳泉
十三支部（大阪市）　浅野牧人
兵庫支部（神戸市）　三崎陽幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水車
北大阪支部（豐中市）　黒川紫香
港支部（大阪市）　多田一波
下關支部（下關市）　多田市多樓
北鮮支部（清津府）　三鴨美笑
蒙疆支部（張家口）　岩崎柳路
上海支部（中華）　植山九天

★★★★★★★★

記後

★★★★★★★★

▼十六卷十二號――それは私たち一箇年間の努力の最後の堆積である。十五卷と十六卷とを合せて大型版の合本をつくらうと思ふ。このよろこびは雜誌を刊行した人でなくては到底味へないよろこびだ。

▼前號は豫想以上に出た。月の半ばには發行所の棚に一部も殘つてゐない。といふ未だ例のない好調を示した。注文に對しては書店を買ひ廻つて、その責をふさいだ。本號も又々增刷だ。

▼月評「川柳一ト筋」の出席者を二部制にした。一人あたりの喋べる分量が多くなつたことがその特徴である。

▼いよ〳〵本號から「武玉川四篇研究」を發表する事とした。この研究を讀まずして古川柳を讀む勿れである。

▼私は四五年前に、江戸の奪守稲荷の本社の笠森稲荷が關西にあることを知つて、その存在をたしかめたいと思ひながら今日に及んだが、十一月十九日の日曜を割き、松坂倶樂部川柳講座の吟行を兼ねて出掛けて見た。風水害の時に石の鳥居が倒れ、廂が毀はれてしまひ、かなり荒れ果てゝはゐたが立派に笠森稲荷のお社があつたので一行は歡聲をあげた。寫眞の整理などもあるので踏査研究の發表は次號へ廻はすことゝした。

▼私の一歩一歩主義がやうやくここまで辿りついた。來るべき二千六百年の柳界へ更に一歩前進することのよろこびを感じながらペンを擱く（路郎）

アサヒビール
大日本麦酒株式會社

募集

第十七卷 第一號課題
十二月五日締切
（十句以内）
三ケ日　須崎豆秋選
屠風　姫田夕鐘選

第十七卷 第二號課題
一月五日締切
（十句以内）
建國祭　前田五健選
魚串　妹尾八九満選

毎號募集（毎月五日締切）
近作柳樽（題詠）　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙列原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は厳守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價
一部　金三十錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料
本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十四年十二月一〇日印刷
昭和十四年十二月十五日發行
第十六卷　第十二號
（毎月一回十五日發行）

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
川柳雜誌社
電話土佐堀（三三三三番）（八一一六六三番）（八一一六四番）
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載
本誌の刊行は有保證新聞紙法に法律による

賣捌書店
（大阪）　參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店（東京）東京堂　巌松堂　吉岡書店
玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可毎月一回十五日發行

幽雅な日本座敷
純高級支那料理

大阪うつぼ
黄鶴樓
電話土佐堀 七五四 二七一九

御宴會に
御商談に
御家族連れに

安産のために

姙娠ゴしての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士述「安産のために」册子呈上

樹林醫學博士
片瀬醫學博士 推奨 監査

ワダカルシューム錠
大阪道修町 和田卯助商店

川卯雅志 No.1911 定價金30錢 送料壹錢